

Ⅶ 情報リテラシーの育成に係る実践

【ポイント】

- メディア・リテラシーなど、主権者として良識ある公正な判断力等を身に付けることが民主政治にとって必要である
- 「公共」では、情報モラルを含む情報の妥当性や信頼性を踏まえた公正な判断力を身に付けることができるよう指導する
- 「情報Ⅰ」では、情報社会における個人の責任及び情報モラルについて理解し、情報と情報技術の適切かつ効果的な活用と望ましい情報社会の構築について考察する
- 豊富な資料や多様なメディアを活用して情報を収集・解釈する力や、情報の妥当性や信頼性を踏まえて公正に判断する力などのメディア・リテラシーの育成を学校のみならず家庭においても図ることが重要である
- メディア・リテラシーについて学校の取組差が大きい
- 情報モラルやメディア・リテラシーの向上を含む情報活用能力の抜本的向上の方策を整理、社会参画に関わる教育内容の改善の一環として捉えつつ、今後関連する教科等で検討する

1 主権者教育につながる情報リテラシー育成の趣旨

令和7年度、参議院議員通常選挙や宮城県知事選挙、衆議院議員総選挙等において、SNSでデマや誹謗中傷が飛び交う状況が問題視され、SNS上の誹謗中傷防止や偽・誤情報対策の必要性が叫ばれる中、高校生の頃から政治について判断できる力を育むため、主権者教育に関連して、高校における情報リテラシー育成の取組がより一層必要である。

県教育委員会では、我が県独自の本ガイドラインを作成する中で、情報リテラシー育成の実践的な事例を集め、紹介することで、各学校における情報リテラシーの育成を推進していきたい。

2 想定される情報リテラシー育成の場面

① 情報リテラシーとは（文部科学省定義）

情報を主体的に利用する能力のこと。また、それを育成するための教育のこと。情報の利用には、情報の探索、評価、発信といった一連のプロセスが含まれる。

② 想定される学習活動（例）

○総合的な探究の時間

文献検索、クロスチェック、メディアの特徴理解など、有益な情報の的確な入手方法を学ぶ

○公共

新聞などのメディアが世論形成に与える影響を学ぶ

○情報Ⅰ

フェイクニュースが正しい情報と誤認されて拡散してしまう要因を考察する

3 現行学習指導要領の情報リテラシーに係る記載

①公共

○高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 公民編

第2章 公民科の各科目

第1節 公共

2 内容とその取扱い

B 自立した主体としてよりよい社会の形成に参画する私たち

（2）主として政治に関わる事項

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。

（イ）政治参加と公正な世論の形成、地方自治、国家主権、領土（領海、領空を含む。）、我が国の安全保障と防衛、国際貢献を含む国際社会における我が国の役割などに関わる現実社会の事柄や課題を基に、よりよい社会は、憲法の下、個人が議論に参加し、意見や利害の対立状況を調整して合意を形成することなどを通して築かれるものであることについて理解すること。

（エ）現実社会の諸課題に関わる諸資料から、自立した主体として活動するために必要な情報を適切かつ効果的に収集し、読み取り、まとめる技能を身に付けること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

（ア）アの（ア）から（ウ）までの事項について、法、政治及び経済などの側面を関連させ、自立した主体として解決が求められる具体的な主題を設定し、合意形成や社会参画を視野に入れながら、その主題の解決に向けて事実を基に協働して考察したり構想したりしたことを、論拠をもって表現すること。

（内容の取扱い）

（キ）アの（エ）については、（ア）から（ウ）までのそれぞれの事項と関連させて取り扱い、情報に関する責任や、利便性及び安全性を多面的・多角的に考察していくことを通して、情報モラルを含む情報の妥当性や信頼性を踏まえた公正な判断力を身に付けることができるよう指導すること。その際、防災情報の受信、発信などにも触れること。

【解説】

政治参加と公正な世論の形成、地方自治については、以下のように捉えることができる。国民主権が民主政治の根幹であり、日本国憲法の基本的原則であること、我が国が国会を中心とする民主政治の仕組みをとっていること、また、天皇が日本国及び日本国民統合の象徴であること、日本国憲法の規定に基づき、内閣の助言と承認により国事に関する行為を行っていることの理解の基に、民主政治は多数決に基づいて行われることが基本であるが、その際には少数者の権利や意見の尊重が必要であること、国民の多様な意見を国政や地方の政治に十分に反映させるために、表現の自由の保障が重要であること、世論の形成に当たっては、政党の役割、圧力団体や住民運動の影響、マス・コミュニケーションやソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）の働きが大きいことを理解できるようにする。また、地方自治の本旨である団体自治、住民自治の考え方について理解を深めるとともに、地方公共団体の首長と議会の議員は、住民の代表としてそれぞれ独立に選挙されること、直接請求権など直接民主制の考え方に基づく仕組みが国政よりもより多く取り入れられていることを理解できるようにする。

その際、民主政治の下では、主権者である国民が、選挙や憲法改正手続における国民投票、地方自治における直接請求権などを通じて政治に参加するなど、政治の在り方について最終的に責任をもつことになること、それゆえ、メディア・リテラシーなど、主権者として良識ある公正な判断力等を身に付けることが民主政治にとって必要であることを理解できるようにすることや、身近な生活に関わる事例を用いることにより、地方自治に対する関心を高めることが大切である。

なお、『政治参加と公正な世論の形成、地方自治』については関連させて取り扱い、地方自治や我が国の民主政治の発展に寄与しようとする自覚や住民としての自治意識の涵養に向けて、民主政治の推進における選挙の意義について指導すること」（内容の取扱い）が必要である。

その際、選挙権年齢が満18歳以上であることの趣旨を踏まえて、間接民主政治における参政権の行使である選挙の意義や、政治的無関心の増大がもつ危険性などについて考察し、理解できるようにすることが必要である。

政治参加と公正な世論の形成、地方自治…に関わる具体的な主題については、例えば、議会制民主主義を通して私たちの意思を反映させるにはどうしたらいいか、なぜ議会を通して意思決定を行う必要があるのか、情報化やグローバル化が進む中で公正な世論はどのように形成され得るか、なぜ人々は不正確な情報を信じたり発信したりしてしまうのか、なぜ政治に参加するのか、といった、具体的な問いを設け主題を追究したり解決したりするための題材となるものである。

その際、例えば、実際の選挙をイメージして何を基準に投票するとよいか、協働して考察し、選挙管理委員会などの専門機関の助言を得ながら、模擬選挙を実施することなどが考えられる。模擬選挙では、選挙に関わる情報などを収集し、読み取り、政策を比較した表を作成したり、大項目の「A 公共の扉」で身に付けた考え方などを活用し、自分の意見に近い具体的な政策を選択したりすることにより、投票する際の判断の手掛かりを身に付ける。また、模擬選挙を振り返り、他者と協働して立案・提案することの大切さについて理解するとともに、有権者になること、平和で民主的な国家及び社会の形成者となることについての自覚や、政治に参加することの重要性についての理解を深めたりすることに向かうことが期待される。

また、例えば、自らが居住している地域社会の課題に関して必要な情報を適切かつ効果的に収集し、読み取って考察、構想し、模擬議会などを実施することも考えられる。その際、政策や制度として何が必要で、財源はどうするのか、費用対効果はどうか、それを実現させるにはどのような法が考えられるかなどを話し合い、さらに、関連する世論調査の結果の分析などを行い、表現できるようにすることなどが考えられる。

②情報Ⅰ

○高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 情報編

2 内容とその取扱い

（1）情報社会の問題解決

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。

（ア）情報やメディアの特性を踏まえ、情報と情報技術を活用して問題を発見・解決する方法を身に付けること。

（イ）情報に関する法規や制度、情報セキュリティの重要性、情報社会における個人の責任及び情報モラルについて理解すること。

（ウ）情報技術が人や社会に果たす役割と及ぼす影響について理解すること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

（ア）目的や状況に応じて、情報と情報技術を適切かつ効果的に活用して問題を発見・解決する方法について考えること。

（イ）情報に関する法規や制度及びマナーの意義、情報社会において個人の果たす役割や責任、情報モラルなどについて、それらの背景を科学的に捉え、考察すること。

（ウ）情報と情報技術の適切かつ効果的な活用と望ましい情報社会の構築について考察すること。

【解説】

ア（ア）情報と情報技術を活用して問題を発見・解決するために、情報には「形がない」、「消えない」、「簡単に複製できる」、「容易に伝播する」などの特性や、表現、伝達、記録などに使われるメディアの特性を理解するようにし、問題解決の一連の流れ及び各場面で必要な知識及び技能を身に付けるようにする。

ア（イ）法を遵守すること、情報モラルを養うこと、情報セキュリティを確保することの重要性、大量かつ多様な情報の発信・公開・利用に対応した法規や制度の必要性が増していることを理解するようにする。

イ（ウ）SNSなどの特性や利用状況を調べることによって、時間や場所を越えてコミュニケーションが可能になったこと、誹謗・中傷などの悪質な書き込みが問題になっていること（中略）などを扱うことが考えられる。

2 内容とその取扱い

（2）コミュニケーションと情報デザイン

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

（ア）メディアとコミュニケーション手段の関係を科学的に捉え、それらを目的や状況に応じて適切に選択すること。

【解説】

イ（ア）よりよくコミュニケーションを行うために、複数のメディアと複数のコミュニケーション手段の組合せについて考える力、コミュニケーションの目的や受け手の状況に応じて適切で効果的な組合せを選択する力、自らの取組を振り返り評価し改善する力を養う。

実際にメディアの扱いやコミュニケーション手段を体験し、それぞれのメリットやデメリットについて扱うことが考えられる。更に、選択したメディアやコミュニケーション手段の組合せを振り返り、評価し改善する学習活動などが考えられる。

4 「今後の主権者教育の推進に向けて（最終報告）」より

○「今後の主権者教育の推進に向けて（最終報告）」

Ⅱ 主権者教育をめぐる課題と今後の推進方策

3 主権者教育の充実に向けたメディア・リテラシーの育成

- ・ 主権者教育を充実し、政治的事象など現実社会の諸課題について子供たちが多面的・多角的に考察を深めるためには、各種の統計、白書、新聞やインターネットの情報などの豊富な資料や多様なメディアを活用して情報を収集・解釈する力や、情報の妥当性や信頼性を踏まえて公正に判断する力などのメディア・リテラシーの育成を学校のみならず家庭においても図ることが重要である。
- ・ 主権者として現実社会の諸課題について、多面的・多角的に考察を深めるには、収集した情報の妥当性や信頼性を踏まえて公正に判断し自分なりの意見を持つこと、自分たちが社会を作っていくという当事者意識を持つことが重要である。

（効果的な指導方法等の開発）

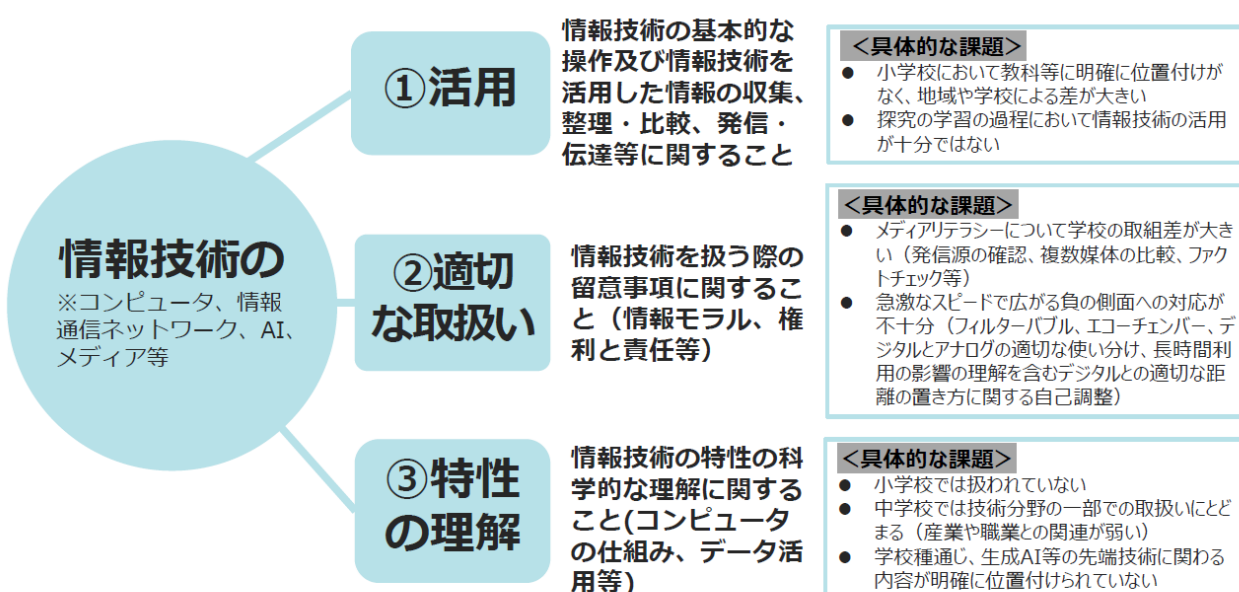
- ・ ①多様なメディアの特性に応じて、適切かつ効果的に必要な情報を収集したり、②収集した情報の妥当性や信頼性を踏まえて公正に判断し自分なりの意見を持つこと、自分たちが社会を作っていくという当事者意識を持てるようにしたりするための指導方法の開発（例えば、SNSなどインターネットを介してはじめに収集した情報を基に、新聞やテレビ等により情報を掘り下げて収集し、その妥当性や信頼性を踏まえて自分の意見をまとめる活動 等）。

5 教育課程企画特別部会「論点整理」（令和7年9月25日）より

補足イメージ4-①

情報活用能力の抜本的向上に係る主な課題

- 小中高を通じた育成体系が不明確であることや、他国と比べ指導内容が不十分であること等の課題を踏まれば、情報活用能力の抜本的向上に向けた内容面の充実の方向性については、**（１）どのように情報技術の活用の実態を高めていくか**（主に①活用）、**（２）内容として不足している部分をどう充実するか**（主に②適切な取扱い、③特性の理解）という観点で総合的に整理することが重要



※指導体制の整備と併せて、技術の進展に伴い、教育内容が妥当性を失うことを防ぎ、教師の負担を可能な限り減らす仕組みを構築する必要

51

＜具体的な課題＞

- ・ メディア・リテラシーについて学校の取組差が大きい（発信源の確認、複数媒体の比較、ファクトチェック等）
- ・ 急激なスピードで広がる負の側面への対応が不十分（フィルターバブル、エコーチェンバー、デジタルとアナログの適切な使い分け、長時間利用の影響の理解を含むデジタルとの適切な距離の置き方に関する自己調整）



具体的な方向性と論点

1. 子供の社会参画に関わる教育内容の充実

＜全ての教科を通じた改善＞

- ① 社会科・公民科を中心としつつ、関連する教科等のWGで、子供の社会参画や意見表明を推進する観点から、見直すべき点がないか検討すべき
※模擬議会・模擬選挙など、地域社会と連携した実践的な学習活動の推進方策については、総務省と協議
- ② 全ての教科等を通じて、自分の意見の根拠を持った説明、一方的な意見の主張に止まらない対話を含む「協働的な学び」を一層重視すべき
※ フィルターバブル・エコーチェンバーの影響が強く指摘される中、第四章（１）では情報モラルやメディアリテラシーの向上を含む情報活用能力の抜本的向上の方策を整理しているが、これらも社会参画に関わる教育内容の改善の一環として捉えつつ、今後関連する教科等のWGで検討を深める

＜特別活動における改善＞

※ 特別活動：「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせ、よりよい集団や学校生活を目指す様々な活動に実践的に取り組む領域

- ① 身近な社会である学級・学校で、多様な個性や特性、背景を持つ他者との対話や協働により、児童生徒が主体となってルールの形成や学校生活の改善、学校行事など様々な活動に参画することにより、「生成AI時代の主権者」として、確かな民主主義の担い手を育み、共生社会を実現する基盤を提供する領域として、特別活動の位置付けを明確化すべき
- ② 児童会・生徒会活動について、教師の適切な指導のもと、校則など学校のルールの設定をはじめとする学校運営に発達段階に応じて子供が関わる仕組みであることを、教育的活動という性質に十分配慮しつつ、明示的に示していくべき（補足イメージ 取組例②③）
- ③ 学校行事について、各行事の特質や教師の過度な負担を生じさせない観点を踏まえつつ、子供たちが創造する活動である旨をより明確にすべき（取組例①④）
- ④ 学級活動について、学級内の多様性を前提に、共生社会の実現に向けた納得解を形成することの重要性をより明確に位置付けてはどうか。このことが社会的障壁の低減や教育課程全体の包摂性の向上に資することが期待される（取組例③）
- ⑤ 以上の改善の実効性を上げるためにも、子供が主体的・実践的に取り組む活動という特別活動の特質を踏まえ、内容の精選を進めるとともに、学習評価の質を向上させるための合理化を検討すべき

2. 取組を促進する方策の充実

＜教師の負担への配慮等＞

- ① 児童生徒の意見を活かした学校運営やルールの形成等の取組を円滑かつ豊かなものにできるよう、クラウドツールの活用方法を含め、意見表明を過度な負担なく学校の様々な活動や運営に繋げる好事例等について、整理・提供すべき
- ② 児童生徒の参画や意見を活かした学校運営、授業づくりに関する指導上の工夫等について、学校管理職や教師等に対する研修を充実させていくべき

＜子供の意見を反映させる受け皿の整備＞

- ① 子供が学校生活での気づきや悩みをクラウドで寄せることができる仕組みなど、学校運営の包摂性を高める取組の一環として、教師の過度な負担なく児童生徒の声を聞く取組を促すことを検討すべき
- ② 学校運営協議会制度（コミュニティスクール）において、子供の社会参画を促す方策を検討すべき（取組例⑤）
 - 子供の社会参画や意見表明の推進を議題とする
 - 子供自身が学校運営協議会に参画する
- ③ 学校評価において、学校運営の評価・改善プロセスに子供が関わることについて、子供の社会参画に関わる教育内容と関連づけることを促すことを検討すべき（取組例⑥）
- ④ 教育振興基本計画や教育大綱の策定をはじめとする地方公共団体での議論において、子供の意見表明の機会を設ける等、学校を超えて子供の社会参画を促すことを検討すべき（取組例⑦）

102

＜全ての教科を通じた改善＞

- ① 社会科・公民科を中心としつつ、関連する教科等のWGで、子供の社会参画や意見表明を推進する観点から、見直すべき点がないか検討すべき
※模擬議会・模擬選挙など、地域社会と連携した実践的な学習活動の推進方策については、総務省と協議
- ② 全ての教科等を通じて、自分の意見の根拠を持った説明、一方的な意見の主張に止まらない対話を含む「協働的な学び」を一層重視すべき
※フィルターバブル・エコーチェンバーの影響が強く指摘される中、第四章（１）では情報モラルやメディア・リテラシーの向上を含む情報活用能力の抜本的向上の方策を整理しているが、これらも社会参画に関わる教育内容の改善の一環として捉えつつ、今後関連する教科等のWGで検討を深める

6 副教材「私たちが拓く日本の未来」より

「特にSNSなどのインターネット上には、誤った情報も含めて様々な情報があふれており、情報の見極めが重要」と記載されており、主権者教育における情報リテラシーの重要性が分かる。

候補者や政党の情報はこう集める！

信頼できる候補者を選ぶための情報収集、実はこんなにあるんです。

インターネット

候補者や政党等のホームページやブログのほか、SNS（X（旧ツイッター）やフェイスブック等）などにより、政策の考え方などを知ることができます。なお、特にSNSなどのインターネット上には、誤った情報も含めて様々な情報があふれており、情報の見極めが重要です。



政党等の公約集

当選したら、どんなことをいつまでに実現させるかを、政党等有権者に向けて発表する選挙公約。パンフレットなどで街頭演説の場所などにおいて無料配布されます。

選挙公報

投票日の2日前までに、世帯ごとに届けられる、新聞に似た印刷物。候補者の氏名、意見や考えなどが掲載されています。インターネットでも同じものが公開されています。

街頭演説

駅前や商店街などの公共の場で、候補者や政党等有権者に直接政策を訴えるもの。



政見放送

候補者や政党等が、テレビやラジオを通じて意見や考えを訴えます。対談形式を用いるなど、有権者に分かりやすく伝える工夫もなされています。



演説会

候補者が開催するものと、政党等が開催するものがあります。



公開討論会

立候補予定者が一堂に集まり、自分の政策や公約などの考え方を有権者に説明したり、立候補予定者同士がお互いに議論したりする場です（選挙運動期間外に限られます）。

新聞・テレビ

選挙の前には、新聞やテレビで、各政党や候補者の政策や選挙での争点について、特集が組まれたり、解説されたりしています。

7 総務省「インターネットとの向き合い方 ニセ・誤情報にだまされないために第2版」

総務省HP「上手にネットと付き合おう！安心・安全なインターネット利用ガイド」には、学校現場でも教材として使えるような分かりやすい資料が掲載されている。主権者教育に限らず、情報リテラシー育成のために、授業等で積極的に活用願う。



PART 01

ニセ・誤情報ってなに？

政治的なニセ・誤情報の具体例

根拠のない情報が選挙に影響を与える可能性がある



選挙が近づくと、特定の政治家に対して、

「外国と通じている」
「増税主義者だ」
「もうすぐ逮捕される」

といった根拠のない情報を流し、世間に誤った印象を植付けるといった事例が起きることがあります。

それらが、一人ひとりの判断に影響を与えてしまう可能性もあるのです。

「ニセ・誤情報」に気付かない人は 「フィルターバブル」に囲まれている可能性も…



ネットニュース、SNS、検索サービスなどには、**その人が欲しがりそうな情報**を分析し**同じような情報**を表示する「アルゴリズム」と呼ばれる機能があります。

「アルゴリズム」によって知らぬ間に
かたよった情報にばかり接する現象を
「**フィルターバブル**」と言います。

その結果、それらの情報が
世の中の標準だと誤解する恐れがあります。

ここまでのまとめ

私たちがだまされてしまう理由

- 理由1 人は**信じたいもの**を信じてしまう
- 理由2 ニセ・誤情報には**信じたくなる要素**がたくさんある
- 理由3 ニセ・誤情報には**人に教えたくなる要素**がある
- 理由4 ニセ・誤情報には**誰でも**だまされる
- 理由5 ニセ・誤情報は**すばやく拡散**してしまう
- 理由6 **アルゴリズム**や**生成AI**、**アテンション・エコノミー**
がニセ・誤情報を加速してしまう

私たちがニセ・誤情報にだまされてしまう理由を分かりやすく解説している。その上で、次ページのように、「だまされないためには？」として「基本」・「応用」を解説しており、情報リテラシー育成の具体的な取組をイメージできる。

基本

まずは以下をチェック！



- ☐ **情報源** はある？
- ☐ その分野の **専門家**？
- ☐ **他では** どう言われている？
- ☐ その画像は **本物**？

応用

さらに以下もチェック！



- ☐ 「**知り合いだから**」という理由だけで信じているのでは？
- ☐ **表やグラフ**も疑ってみた？
- ☐ その情報に **動機** はある？
- ☐ **ファクトチェック** 結果は？

8 情報リテラシーの育成に係る各教科の実践事例（次ページ以降）

＜実践事例提供者＞

○「公共」実践事例

片平 敏誌	教諭	仙台第三高校
花渕 成美	教諭	登米総合産業高校

○「情報Ⅰ」実践事例

塩 雄太	教諭	宮城野高校
尾形 大	教諭	石巻西高校

○「総合的な探究の時間」実践事例

地主 修	教諭	仙台二華高校
------	----	--------

○「論理国語」実践事例

伊藤 雄治	教諭	宮城野高校
-------	----	-------

○「特別活動」実践事例

八嶋 圭吾	教諭	白石工業高校
-------	----	--------

※「情報リテラシー」はすべての教科・科目の教育活動において育成していくものであり、自立した社会の形成者（主権者）の育成の土台となる重要な資質・能力である。

※掲載している実践事例については、本ガイドラインの趣旨に合わせた様式で作成しているため、今後、学習指導案等を作成する場合は、各教科・科目の様式により作成願う。なお、内容を一部省略している事例もある。

主権者教育（情報リテラシーの育成）実践事例

学校名	宮城県仙台第三高等学校 全日制課程		
教 科	公民科	科 目	公共
単位数	3単位（普通科）	対象学年	2 学年
単元名	主として法に関わる事項	内容のまとめ	B 自立した主体としてよりよい社会の形成に参画する私たち (主として法に関わる事項)
単元の目標	自立した主体としてよりよい社会の形成に参画することに向けて、現実社会の諸課題に関わる具体的な主題を設定し、幸福、正義、公正などに着目して、他者と協働して主題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるようにする。 - 法や規範の意義及び役割、多様な契約及び消費者の権利と責任、司法参加の意義などに関わる現実社会の事柄や課題を基に、憲法の下、適正な手続きに則り、法や規範に基づいて各人の意見や利害を公平・公正に調整し、個人や社会の紛争を調停、解決することなどを通して、権利や自由が保障、実現され、社会の秩序が形成、維持されていくことについて理解する。 - 現実社会の諸課題に関わる諸資料から、自立した主体として活動するために必要な情報を適切かつ効果的に収集し、読み取り、まとめる技能を身に付ける。(情報リテラシーの育成) - 主として法に関わる事項について、法、政治及び経済などの側面に関連させ、自立した主体として解決が求められる具体的な主題を設定し、合意形成や社会参画を視野に入れながら、その主題の解決に向けて事実を基に協働して考察したり構想したりしたことを、論拠をもって表現する。(情報リテラシーの育成) - 現実社会の諸課題について、よりよい社会の実現を視野に、現代の諸課題を主体的に解決しようとする。		
単元の 評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	- 法や規範の意義及び役割、多様な契約及び消費者の権利と責任、司法参加の意義などに関わる現実社会の事柄や課題を基に、憲法の下、適正な手続きに則り、法や規範に基づいて各人の意見や利害を公平・公正に調整し、個人や社会の紛争を調停、解決することなどを通して、権利や自由が保障、実現され、社会の秩序が形成、維持されていくことについて理解している。 - 現実社会の諸課題に関わる諸資料から、自立した主体として活動するために必要な情報を適切かつ効果的に収集し、読み取り、まとめる技能を身に付けている。	幸福、正義、公正などに着目して、主として法に関わる事項について、法、政治及び経済などの側面に関連させ自立した主体として解決が求められる具体的な主題を設定し、合意形成や社会参画を視野に入れながら、その主題の解決に向けて事実を基に協働して考察したり構想したりしたことを、<u>論拠をもって表現している。</u>	現実社会の諸課題について、よりよい社会の実現を視野に、現代の諸課題を主体的に解決しようとしている。
教材名等	「高等学校 改訂版 公共」(第一学習社)、消費者庁「社会への扉」など		

※公民科の実践事例では、特に情報リテラシーの育成に関わる活動等について、下線で示しています。

【参考資料】

- ・「高等学校学習指導要領(平成三十年告示)解説 公民編 https://www.mext.go.jp/content/20211102-mxt_kyoiku02-100002620_04.pdf
- ・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(高等学校編) 公民 https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r030820_hig_koumin.pdf
- ・「学習評価の事例集」(宮城県版) 高等学校第2編(各教科) 公民 <https://www.pref.miyagi.jp/documents/37207/5koumin.pdf>
- ・総務省「上手にネットと付き合おう!」https://www.soumu.go.jp/use_the_internet_wisely/special/filterbubble_echochamber/
- ・総務省など アテンション・エコノミー <https://ictliteracy-game.soumu.go.jp/game/attention-economy>
- ・消費者庁 社会への扉 https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_education/public_awareness/teaching_material/material_010/assets/teaching_material_240508_0001.pdf
- ・令和5年度消費者意識基本調査 https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_research/research_report/survey_002/assets/consumer_research_cms201_240614_15.pdf
- ・総務省 新型コロナウイルス感染症に関する情報流通調査 報告書 https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01kiban18_01000082.html
- ・国際グローバル・コミュニケーション・センター日本におけるフェイクニュースの実態と対処策 https://www.innovation-nippon.jp/reports/2019IN_report_full.pdf

【単元の導入の問い】

EC サイトや SNS はわたしたちの消費活動にどのような影響・変化をもたらしただろうか。

【単元を貫く問い】情報化が進展した現代社会において、望ましい消費者の態度とはどのようなものか。

【第一次の問い】購買行動をめぐる消費者・企業の行動原理にはどのようなものがあるか。

【第二次の問い】現代社会における情報の伝播・拡散・共有にはどのような特徴があるか。

【第三次の問い】情報への接し方を含めて、消費者として望ましい態度とはどのようなものか。

指導と評価の計画(8時間)

○「評価に用いる評価」●「学習改善につなげる評価」

次	ねらい・学習活動等 ◇学習活動の概要 問主発問 留指導上の留意点	評価の観点			評価規準等
		知	思	態	
単元の導入 1時間	◇EC サイトや SNS の登場前後で、わたしたちの消費行動がどのように変化したのかを考えることを通じて、<u>情報化が進展した現代に特有の課題があることに気づく</u>。【単元を貫く問い】を設定し、単元の学習に見通しを持つ。 問 EC サイトや SNS が登場する以前に、わたしたちはどのように購買行動を行っていたのだろうか。どのような情報を重視していたのだろうか。 留・高度経済成長期などの購買行動が伝わるような資料や商店街の画像などを必要に応じて援用し、現代の購買行動との違いに気づかせる。また契約の原則や消費者の権利といった消費行動の前提について言及する。			●	●【単元を貫く問い】の解決に向けて、問いに対する答えを予想したり、解決すべき疑問を挙げたりするなど、解決への見通しを立てている。(ワークシート、発言)
第一次 2時間	◇悪徳商法およびダークパターンといった事例の検討を通じて、企業による適切な戦略のあり方について考える。【第一次の問い】を設定する。 問 EC サイトなどにおける適切な UI (ユーザーインターフェース) とダークパターンを分けるのはどのような要素であるか。 留・それぞれについて具体的な事例を調べながら、考えを深める。悪徳商法とは異なり、明確に違法とは言いきれないが不便なデザイン・仕組みが、生活の中に存在していることを意識させる。 ◇消費者の行動原理や情報の非対称性といった概念をもとに、わたしたちに求められる消費行動や考え方を表現することで、【第一次の問い】を追究する。 問 消費や契約の前提となる情報の非対称性や、悪徳商法の種類等を踏まえて、企業と消費者それぞれにはどのような責任が求められるだろうか。 留・消費行動において、企業と消費者の双方の視点から気を付けるべき事項を想像できるよう、異なる意見を有する生徒と意見交換したり相談しあったりする機会を設ける。 ・情報の非対称性の他、デモンストレーション効果や依存効果といった概念も必要に応じて取り扱う。	●		●	●企業の購買戦略の具体例について、<u>必要な情報を適切かつ効果的に収集し、読み取っている</u>。(観察、発表) ●消費者の行動原理等について、<u>具体的な資料に基づいて理解を深めている</u>。(ワークシート)

第二次 3時間	◇情報の共有拡散の功罪について、現代社会の実例をもとに考えることで、【第二次の問い】を設定する。 問 消費者のロコミは現代においてどのようにマーケティングに利用されているか。ロコミやレビュー機能の悪用事例にはどのようなものがあるか。 留>・<u>ニュース記事や報告書などに基づいたまとめを促す。</u> ◇諸資料や調査結果を読み解きながら、不確かな情報を共有拡散する者の傾向や心理をつかむ。 問 消費者庁や総務省、その他メディア関係機関等の報告書から読み取れる消費行動の際に重視する情報、情報の拡散者の心理といった行動傾向の特徴はどのようなものか。 留>・グラフや図表を読解させるのみならず、複数の資料の中からの情報が追究している問いと関連しているかについても考察する。 ◇エコーチェンバー、アテンション・エコノミー等について学び、<u>なぜ誤情報が拡散されるのか、その背景を想像する。</u> 問 消費者庁のシミュレーションサイトを体験してどのように感じるか。動画投稿サイト・SNSの具体的な収益化のしくみや条件がどうなっているか。 留>・エコーチェンバーやアテンション・エコノミーについての疑似体験が可能なサイトなどを通じて、誤情報の拡散やそのしくみについて想像する。 ◇エコーチェンバーやアテンション・エコノミーといった消費社会の原理が、わたしたちの生活全般に及ぼす影響について発展的に考察する。 問 誤情報の拡散を促進するようなしくみが、消費行動以外の領域において、わたしたちにどのような影響をもたらすか。 留>・現実社会において、このような原理が影響したと思われる事例をまとめながら考えを広げられるようにする。	● ● ● ○		●現代におけるロコミ等の活用事例について、<u>必要な情報を適切かつ効果的に収集し、読み取っている。</u>(ワークシート) ●諸資料から、<u>考察に必要な情報を適切かつ効果的に読み取り、まとめることができる。</u>(記述) ●幸福、正義、公正などに着目して、アテンション・エコノミーなどがもたらす影響について、多面的・多角的に考察し、<u>論拠をもって自身の考えを表現している</u>(記述)。 ○幸福、正義、公正などに着目して、現実社会への影響について、多面的・多角的に考察し、<u>論拠をもって自身の考えを表現している</u>(発表)。
第三次 1時間	◇前時までの学習をふまえ、わたしたちがとりうる法的対応や予防策等について整理し、【第三次の問い】を設定する。 問 悪徳商法やその他消費行動に関して、私たちを守る法制度・しくみにはどのようなものがあるか。 留>・法的な対応ができるものと、対応がしがたいものを把握することを通じて、<u>情報リテラシーの重要性に気づけるようにする。</u>	○		○諸資料から、<u>考察に必要な情報を適切かつ効果的に読み取り、まとめることができる。</u>(記述)

単 元 の ま と め 1 時 間	◇前次までの学習をふまえ、【単元を貫く問い】について自らの考えを論述しつつ、学習を振り返る。 問 普段の私たちの情報の接し方について、どのような態度で臨むことが望ましいか。 留〉・個人による論述課題を課し、【単元を貫く問い】に対し自らの考えをまとめる際は、第一次から第三次までの学習を振り返るよう助言する。			○ ○	○単元の導入時に立てた見通しを踏まえて、学習に対する自身の関わりを振り返り、学習の意義を見いだしている。(記述) ○よりよい社会の形成に参画することに向けて関心を持ち、問い続けていくべき現代の諸課題とその課題を問い続けていくことの意義を見いだしている。(ワークシート)
---	---	--	--	-------------------	--

主権者教育（情報リテラシーの育成）実践事例

学校名	宮城県登米総合産業高等学校 全日制課程		
教 科	公民科	科 目	公共
単位数	2 単位	対象学年	1 学年
単元名	政治参加と民主政治の課題	内容の まとめ	B 自立した主体としてよりよい社会の 形成に参画する私たち (主として政治に関わる事項)
単元の目標	自立した主体としてよりよい社会の形成に参画することに向けて、民主政治や地方自治、政治参加と公正な世論の形成など、現実社会の諸課題に関わる具体的な主題を設定し、幸福、正義、公正などに着目して、他者と協働して主題を追及したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるようにする。 - 民主政治や地方自治、政治参加と公正な世論の形成などに関わる現実社会の事柄や課題を基に、よりよい社会は、憲法の下、個人が議論に参加し、意見や利害の対立状況を調整して合意を形成することなどを通して築かれるものであることについて理解する。 - 現実社会の諸課題に関わる諸資料から、自立した主体として活動するために必要な情報を適切かつ効果的に収集し、読み取り、まとめる技能を身に付ける。<u>(情報リテラシーの育成)</u> - 政治参加と民主政治の課題について、法、政治及び経済などの側面を関連させ、自立した主体として解決が求められる具体的な主題を設定し、合意形成や社会参画を視野に入れながら、その主題の解決に向けて事実を基に協働して考察したり構想したりしたことを、<u>論拠をもって表現する。</u>(情報リテラシーの育成) - 現実社会の諸課題について、よりよい社会の実現を視野に、現代の諸課題を主体的に解決しようとする。		
単元の 評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	- 民主政治や地方自治、政治参加と世論の形成などに関わる現実社会の事柄や課題を基に、よりよい社会は、憲法の下、個人が議論に参加し、意見や利害の対立状況を調整して合意を形成することなどを通して築かれるものであることについて理解している。 - 現実社会の諸課題に関わる諸資料から、自立した主体として活動するために必要な情報を適切かつ効果的に収集し、読み取り、まとめる技能を身に付けている。	幸福、正義、公正などに着目して、政治参加と民主政治の課題について、法、政治及び経済などの側面を関連させ、自立した主体として解決が求められる具体的な主題を設定し、合意形成や社会参画を視野に入れながら、その主題の解決に向けて事実を基に協働して考察したり構想したりしたことを、<u>論拠をもって表現している。</u>	現実社会の諸課題について、よりよい社会の実現を視野に、現代の諸課題を主体的に解決しようとしている。
教材名等	「改訂版 高等学校 公共 これからの社会について考える」(数研出版)、「私たちが拓く日本の未来」(文部科学省・総務省)		

※公民科の実践事例では、特に情報リテラシーの育成に関わる活動等について、下線で示しています。

【参考資料】

- ・「高等学校学習指導要領(平成三十年告示)解説 公民編 https://www.mext.go.jp/content/20211102-mxt_kyoiku02-100002620_04.pdf
- ・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(高等学校編)公民 https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r030820_hig_koumin.pdf
- ・「学習評価の事例集」(宮城県版)高等学校第2編(各教科)公民 <https://www.pref.miyagi.jp/documents/37207/5koumin.pdf>

次	ねらい・学習活動等 ◇学習活動の概要 問主発問 留指導上の留意点	評価の観点			評価規準等
		知	思	態	
単元の導入 1時間	【導入のねらい】SNSやマスメディアが世論の形成に与える影響力の大きさについて検討し、適切な「メディアリテラシー(情報リテラシー)」を身に付けることの必要性について問いを設定させるとともに、その解決に向けた見通しをもたせる。 ◇過去のテロ対策法案を巡る「共謀罪」や「テロ等準備罪」という新聞各紙の呼び方や報道の違いを比較する活動を通して、<u>同じ事実であっても情報の伝え方によって受け手の印象が大きく異なることに気付く。</u> ◇<u>情報に流されない「メディアリテラシー(情報リテラシー)」の必要性について生徒各自が探究する問いを設定し、課題解決への見通しを持たせる。</u> 問 インターネット上の「いいね」が多い意見に従えば、私たちの社会は幸せになるのだろうか。 留・今話題になっているニュースを取り上げ、意見や世論を述べられるように下準備したり、その場で調べさせたりする時間を設ける。 ・ネット上の「いいね」の多さが必ずしも社会全体の正解(幸福や公正)とは限らない点に気付かせるために、賛成か反対かだけでなく、生徒が多面的・多角的な視点から議論できるニュースを取り上げるようにする。 問 メディアが発信する情報や「世論」には、どのような偏りや危険性が潜んでいるのだろうか。 留・新聞各紙の見出しを比較させるために、同日の新聞を複数社分用意し、電子データで学級全体に配布する。			●	●新聞各紙の見出しを比較しながら作成したワークシートの比較表をもとに、マスメディアの伝え方次第で、受け手の印象が異なること、メディアによって世論操作が行われていることに気づき、課題を見いだしている。(記述)
	【単元を貫く問い】情報があふれる現代社会で、私たちは「自立した主体」として、どのように政治やメディアと関わり、必要な情報を適切かつ主体的に利用すべきなのだろうか？		●		●【単元を貫く問い】の解決に向けて、考察した内容を踏まえながら、答えを予想したり、疑問を挙げたりするなど、解決への見通しを立てている。(記述、観察)

第一次 1時間	【第一次のねらい】日本の選挙制度が抱える課題について多面的・多角的に考察することを通して、選挙の役割と意義について理解させる。 ◇世代別人口や投票率の格差が、予算や公約の決定にどのような影響を与えるかを計算・分析する作業を通して、若者の投票率や選挙制度の課題について問いを設定し、課題解決への見通しを立てる。 ◇若者の投票率の低下や投票率の重みに気付き、グループで協働して一票の格差や死票といった選挙制度が抱える課題について考察し、<u>論拠をもって表現する。</u> 問 「○○党が圧勝！」といったニュースが流れたとき、その裏で「誰のどんな意見」が死票になっているのだろうか。 留)・架空の自治体データ等を用い、特定の政党を批判・支持する形にならないよう政治的中立性に留意する。 ・単なる計算作業で終わらず、得票率と議席数の相違(小選挙区制の性質)や棄権者の存在に気付かせる発問を行う。 ・若者の低投票率の要因について多面的・多角的に考察し、社会の構造的課題として捉えさせるとともに少数意見(死票)を反映するしくみの重要性に気付かせる。	○	●	○ワークシートについて、世代別人口と投票率の関係性を正しく読み取り、若者の政治的無関心や少子高齢化、一票の格差について理解している。(記述) ●【第一次の問い】について、表の読み取りから一票の格差や死票といった選挙制度の課題を多面的・多角的に考察し、論拠をもって表現している。(記述・発表)
第二次 1時間	【第二次のねらい】選挙活動について考察する活動を通して、必要な情報を適切かつ効果的に収集し、読み取り、活用する技能を身に付ける。 ◇ワークシートより、魅力的な公約とそれを実現するために誰に負担を強いるかという財源論について考察し、問いを設定する。 問 ポスターに書かれた「魅力的な公約」にだまされず、本当に実現できる責任ある政策かどうかを見極めるには、どこに注目すればよいだろうか。 ◇メディアやポスターで強調されがちなメリットだけではなく、その裏にある負担(増税)について理解し、スローガンや一部の集団だけの利益誘導に対する課題を見だし、<u>社会全体の幸福や公正の視点から主体的に情報を収集し、読み取っている。</u> 留)・公約(メリット)と財源(コスト)の比較を通じ、「幸福」と「公正」のバランスを意識させるよう心掛ける。 ・スローガンを鵜呑みにしない情報リテラシー(ポピュリズムへの批判的視点)を養いつつ、単なる政治批判に終始させない発問を意識する。 ・批判で終わらず、「自分ならどう財源を捻出するか」という当事者としての代替案を考えさせるなど、責任ある主権者としての態度を育む。	●	○	●ワークシートより自らが選択した架空の公約実現に必要な財源を誰にどういった形で負担させるのか現実的に検討し、論拠をもって表現している。(記述・発言) ○【第二次の問い】の解決に向けて、主権者が投票する際に注意すべきポイントを幸福・正義・公正などに着目して考察している。(記述・発言)

第三次 2時間	【第三次のねらい】地方自治における課題について理解を深め、身近な地域の課題に対する多面的・多角的な考察を通して、必要な情報を適切かつ効果的に活用しながら地域社会に関わる態度を身に付ける。 ◇グラフから、地方公共団体の財源が国のお金(国庫支出金など)に依存している現状(三割自治)を読み解くとともに住民による直接請求権や首長・議会の関係について理解する。 ◇テレビで流れる「国の遠いニュース」と、自分たちの町の「予算や住民投票」という身近なニュースの報じられ方の違いを比べる活動を通して、<u>メディアの報道から必要な情報を適切かつ効率的に収集し、読み取りながら身近な地域課題の解決に向けて【第三次の問い】を設定する。</u> 問 国会を報じるニュースよりも、「住民の直接請求」や「町の予算」に注目することが、なぜ自分たちの生活を守る近道になるのだろうか。 留)・身近な予算や直接請求に注目させ、「幸福」と「公正」が生活に直結する場として地方自治を捉えさせ、【単元を貫く問い】に結びつける。 ・大量に流れる全国ニュースに埋もれがちな「地域課題」に着目させ、メディアの報道量に左右されずに主体的に情報を確かめるリテラシーを養う。 ・「三割自治」という財政の限界を提示しつつも、住民の監視や直接請求などの住民の社会参画(住民自治)が生活を守るために不可欠であることに気付かせる。		○	○三割自治のグラフ分析と、全国ニュースと地方情報の比較ワークをもとに、【単元を貫く問い】の解決に向けて、国政の動向だけでなく身近な地域課題(予算や住民投票)に注目することが自分の生活を守る直近の道である理由について、住民自治の仕組みと結びつけながら論拠をもって表現している。(記述、発言) ○ 全国ニュースの報道量に流されることなく、適切に情報を活用し、身近な地域社会の課題に関心をもち、主権者として地域社会に関わることの意義を見いだしている。(記述)
単元のまとめ 1時間	◇本単元を振り返り、ニュースの「内閣支持率」のグラフやネットの極端な意見をグループで検証する。<u>情報に流されないための「マニフェスト(自分との公約3か条)」を言葉にする活動を通して、これから18歳を迎える一人の主権者として、自分の意見を持って社会に関わろうとする覚悟を持たせる。</u> 問 情報があふれる現代社会で、私たちは「自立した主体」として、どのように政治やメディアと関わり、必要な情報を適切かつ主体的に利用すべきなのだろうか？ 留)・内閣支持率のグラフ等を検証する際、「サンプルの数や集計方法(しくみ)」と「視覚的な見せ方(メディア)」の双方に着目させ、データの裏にある意図を見抜く視点をもたせる。 ・極端な意見や偏ったデータに触れる中で、他者をただ批判・冷笑するのではなく、自分自身の思い込みや先入観に気付かせるような発問を心掛ける。 ・「マニフェスト」の作成において、単なるスローガンに終わらず、【単元を貫く問い】と関連付けた「主権者として明日から実行できる具体的な行動」へつながるよう指示する。		○	○本単元の学習活動を振り返り、【単元を貫く問い】のまとめとして、情報があふれる現代社会において「自立した主体」として「マニフェスト(自分との公約3か条)」を、これからの日常で実践できるような言葉で作成し、18歳の主権者として社会に主体的に関わろうとしている。(記述・発表・ワークシート)

24 4 - 1 - 0 世論の形成と政治参加

月 日()

☆ () について、
インターネット上の「いいね」が多い意見に従えば、私たちの社会は幸せになるのだろうか？

自分の意見：幸せに (なる ・ ならない)

理由

◇「共謀罪」って、どんな罪？

配布データは、組織犯罪処罰法案が国会で審議されることが決まった翌日の朝の新聞各社の一面です。それぞれの新聞のどこに「共謀罪」の文字があるのか探し、次の問いに答えよう。

問1 「共謀罪」が書かれていない新聞社はどこだろう？ ()

問2 問1の新聞社で、「共謀罪」の代わりに使われている言葉は何だろう？ ()

問3 なぜ問2のような言葉を使うのだろうか、予想してみよう。

()

問4 「共謀」と問2の言葉の印象を表に書き入れ、比較してみよう。

共 謀 (きょうぼう)	問2の言葉
言葉のイメージ：	言葉のイメージ：
法案に対するイメージ：	法案に対するイメージ：

問5 同じニュースでも新聞各紙の呼び方や報道の違いによって、受け手の印象が変わってしまうことがある。もしまだ事件の犯人と決まっていない人が犯人のように報道されてしまったら、SNSでどんな噂が広まるだろうか？その結果、どんな困ったことが起きるか予想してみよう。

自分の予想 ()

解答

24 4 - 1 - 0 世論の形成と政治参加

月 日()

★メディアが発信する情報や「世論」には、どのような偏りや危険性が潜んでいるのだろうか？
教科書を使って、表をまとめよう。

語 句	意 味
① 世論	()
② ()	政府がマスメディアを利用したり、マスメディア自体が特定の世論の形成を誘導したりすること
③ マスメディア	()
④ ()	マスメディアの特性を理解して使いこなす複合的な能力のこと（例：批判的洞察力など）
【まとめ】 マスメディアの特性を理解して使いこなす複合的な能力（ ） が求められている。公共の問題について、多くの人が共通してもつ意見を（ ）と いい、政権運営を含め、現代社会において、きわめて重要な役割を果たすようになった。	

☆④の能力について、具体的にどのような力のことだろうか？自分の考えを述べよう。

()

この単元では、以下の課題について考えていきます。

【単元を貫く問い】情報があふれる現代社会で、私たちは「自立した主体」として、
どのように政治やメディアと関わり、必要な情報を適切かつ主体的に利用すべきなのだろうか？

【単元を貫く問いについて、クラスで出した予想】

主権者教育（情報リテラシーの育成）実践事例

学校名	宮城県宮城野高等学校 全日制課程		
教 科	情報科	科 目	情報 I
単位数	2 単位	対象学年	1 年次
単元名	情報リテラシーに関わる事項	内容のまとめ	・情報社会の問題解決 ・コミュニケーションと情報デザイン
単元の目標	<情報社会の問題解決> 情報と情報技術を活用した問題の発見・解決の方法に着目し、情報社会の問題を発見・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるようにする。 (1) 情報に関する法規や制度、情報セキュリティの重要性、情報社会における個人の責任及び情報モラルについて理解する。 (2) 情報に関する法規や制度及びマナーの意義、情報社会において個人の果たす役割や責任、情報モラルなどについて、それらの背景を科学的にとらえ、考察する。 (3) 情報モラルに配慮して情報社会に主体的に参画しようとする。		
	<コミュニケーションと情報デザイン> メディアとコミュニケーション手段及び情報デザインに着目し、目的や状況に応じて受け手に分かりやすく情報を伝える活動を通して、次の事項を身に付けることができるようにする。 (1) 効果的なコミュニケーションを行うための情報デザインの考え方や方法を理解するとともに、表現する技能を身に付ける。 (2) メディアとコミュニケーション手段の関係を科学的に捉え、それらを目的や状況に応じて適切に選択する。 (3) よりよいコミュニケーションを行うために自らの取組を振り返り評価し改善することを通して情報社会に主体的に参画しようとする。		
単元の 評価規準	<情報社会の問題解決>		
	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	①情報に関する法規や制度、情報セキュリティの重要性、情報社会における個人の責任及び情報モラルについて理解している。	①情報に関する法規や制度及びマナーの意義、情報社会において個人の果たす役割や責任、情報モラルなどについて、それらの背景を科学的にとらえ、考察している。	①情報モラルに配慮して情報社会に主体的に参画しようとしている。
	<コミュニケーションと情報デザイン>		
	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	①効果的なコミュニケーションを行うための情報デザインの考え方や方法を理解するとともに、表現する技能を身に付けている。	①メディアとコミュニケーション手段の関係を科学的に捉え、それらを目的や状況に応じて適切に選択することができる。	①よりよいコミュニケーションを行うために自らの取組を振り返り評価し改善することを通して情報社会に主体的に参画しようとしている。
教材名等	教科書：東京書籍 情報 I Step Forward! 副教材：東京書籍 ニューステップアップ情報 I 教科書傍用問題集		

※「情報リテラシーに係る事項」について、(1) 情報社会の問題解決と (2) コミュニケーションと情報デザインの 2 つの内容から関連する部分をまとめて取り扱う。

次	ねらい・学習活動等 ◇学習活動の概要 問主発問 留指導上の留意点	評価の観点			評価規準等
		知	思	態	
単元の導入 1時間	◇「単元1：情報とその特性」にて、情報の定義や特性・特徴を理解し、身の回りにあふれている情報が「自身にとって必要なものか」、「信憑性がある情報か」等の判断ができるよう、評価する視点や情報を扱う上での留意点について理解を深め、情報リテラシーの必要性を理解する。 問 「情報」の特性とは何でしょうか。 留)・情報と「もの」との違いについて、イメージさせながら考えさせる。 ・情報には4つの特性「形がない」、「消えない(残存性)」、「簡単に複製できる(複製性)」、「容易に伝播する(伝播性)」をイメージできるよう工夫する。 問 「情報」において気を付けるべきことや正しい情報かどうか評価するポイントは何でしょうか。 留)・情報は作り手が存在し、何らかのメディアを介して伝えられるため、信憑性に注意しなければいけない。フェイクニュースやデマ情報に惑わされないよう、ファクトチェックの重要性を理解させる。			●	●問いに対する答えを予想している、「もの」との違いを考え、情報の特性を理解しようとしている。(ワークシート)
第一次 1時間	◇「単元2：メディアとその特性」にて、メディアの特性・特徴を理解し、情報がどのように伝達されるのか理解を深め、コミュニケーションにおけるメリット・デメリットを考える。また、コミュニケーションにおいて適切な手段の選択や情報の受発信をするためにメディアリテラシーの力が必要であることを理解させる。 問 それぞれのメディアの特性は何でしょうか。 留)・表現、伝達、記録の各メディアの特性を踏まえ、コミュニケーションを行う際に、どのような「伝達手段」と「表現方法」で行うかによって、誤解などが生じないように配慮する必要性を理解させる。 問 コミュニケーションにおいて、それぞれのメディアを活用する上で、気を付けるべきことは何でしょうか。 留)・対面では言語(バーバル)コミュニケーションだけでなく、非言語(ノンバーバル)コミュニケーションによって、相互理解を深めることにもつながることを理解させる。 ・SNSやインターネット上では、相手の顔が見えない分、より慎重に言葉の表現や感情の表現に気を付ける必要がある。 電話やメッセージ等、対面ではない場合のコミュニケーションで生じる認識のズレを取り上げてイメージを持たせる工夫をする。 ⇒例：「運動のために一駅分、歩く」という会話 Aさんは仙石線のイメージで駅間が1～2km程度と認識 Bさんは常磐線のイメージで駅間が5～6km程度と認識	●		○	●メディアごとの特性を理解している。(ワークシート) ○SNS等のオンライン上で行われるコミュニケーションや伝える情報に対して、メディアの特性を踏まえ、適切なメディアを判断し、気を付けるべき点を考えることができる。(発表・ワークシート)

第二次 2時間	◇「単元6：知的財産」にて、知的財産である著作物や産業財産を守る上で、理解すべき法律や制度を理解し、著作権等の権利を侵害しないようにするための注意点や許諾方法等について理解を深める。また、オンラインにおける利用（公衆送信）における利用について、著作権法第35条の内容についても授業や学校行事に関連する部分を中心に理解を深め、どのようなケースが権利の侵害になるのかを考察する。 問 知的財産における「著作権」および「産業財産権」とはどのような権利でしょうか。 留）・著作権や産業財産権がどのような権利なのか、保護の対象や保護期間、法律が整備されている目的について、CRIC（著作権情報センター）や関連ホームページ「みんなのための著作権教室」、文化庁ホームページの著作権関連の内容を参考に関連する事例やイメージしやすい事例を挙げながら、理解を促す。 問 著作権において、プライベート（個人）での利用と授業での利用における違いやオンライン上で著作物を取り扱う場合に注意すべき点はどのようなことでしょうか。 留）・プライベートでの利用と学校（授業）での利用における注意点について、SARTRASの「授業目的公衆送信補償金制度」等を踏まえながら、どのような状況の場合、許諾を必要とするのかを理解させる工夫を行う。 また、SARTRASのホームページ内にある「申請済教育機関設置者・教育機関の名称検索」を活用し、自身が所属している学校が含まれていることを確認することも時間があればやってみるとよい。	●	○	●知的財産における「著作権」や「産業財産権」について理解している。（ワークシート） ○オンライン環境で著作物扱うために、プライベートな利用と授業での利用の違いを考え、授業目的のオンライン利用についてどのような点に注意すべきか考察する。（発表・ワークシート）
第三次 1時間	◇「単元7：個人情報」にて、個人情報がどのようなもので、どのような場面で活用されるのかを理解し、自他の個人情報を安全に取り扱うための方法や、法律で定められているルールについて理解を深める。また、SNS等に記載された個人情報について、個人が特定される原因や発信者情報が流出してしまう要因と、安全な利用方法について考察する。 問 「個人情報」とは何でしょうか。 留）・個人情報にあたる情報の事例や個人情報の「基本四情報」について実際に活用される場面等のイメージしやすい事例を挙げながら、理解を促す。 問 情報を発信する際の危険性は何か。 留）・個人情報が流出してしまったり、悪用されてしまったりした場合に起こりうる危険性について、インターネット等を活用し、根拠となる情報をまとめられるよう工夫する。また、「発信者」、「消費者・利用者」としての視点で考えるよう促す。	●	○	●個人情報について理解している。（ワークシート） ○個人情報が特定される可能性のある事象や状況を考察し、危険を回避するための対策を科学的な根拠をもとに考察することが出来る。（発表・ワークシート）

第四次 1時間	◇「単元9：情報モラルと個人の責任」について、法律と制度による規制や、個人が果たすべき責任について理解し、現状と課題について理解を深める。 問 インターネットが発生したトラブルに関わる法律や世の中の動きについて考えてみましょう。 留)・インターネットトラブルに関わる主な法律や日本の法制度の動きについて理解できるよう、関連する事例やイメージしやすい事例を挙げながら、理解を促す。 問 インターネットが発生したトラブルや情報機器を利活用した際に発生するトラブルに関わる法律や世の中の動きについて考えてみましょう。 留)・法律ができることで利便性等にどのような変化が起こるのか、お互いに意見を出し合えるように工夫する。	●	●	●インターネットトラブルに関する法律について理解している。(ワークシート) ●法律で禁止されているものとマナーによる対応が期待されているものの違いを考えることができる。(発表)
第五次 2時間	◇「単元11：情報技術が社会に与える光と影」について、健康への影響やデジタルデバイド、生成AIに関する特徴や注意点について理解を深める。 問 「健康への影響」や「デジタルデバイド」とは何でしょうか。 留)・「健康への影響」に関わる事例やネット依存チェックリスト、デジタルデバイド解消に向けた実際の事例を用いて、理解を促す。 問 生成AIのメリット・デメリットにはどのようなものがあるか考えてみましょう。 留)・さまざまなAIと生成AIとの違いについても理解できるよう工夫する。例えば、具体的な理解につなげるため、総務省や経産省、文化庁等の公的機関で示されているガイドラインや定義を参考に意見をまとめるよう促す。 問 Google Gemini を活用して、画像を生成してみましょう。 留)・プロンプト(命令・指示)をどのような内容にすると理想とする結果が出力されるのか、わざと失敗した例を示し、それらを改善するためにはどのようにすればよいか検証できるよう工夫する。 問 Google Gemini を活用して、問題解決をしてみましょう。 留)・それぞれが決めたテーマに合わせて、生成AIと対話(壁打ち)をしながら、ファクトチェックやハルシネーション、バイアスに気を付けて実践するよう促す。また、AIが回答した情報の根拠についても科学的な根拠があるかを検証し、生成AIの強み・弱みについて理解を促すよう工夫する。	● ●	○ ○	●健康への影響の内容やデジタルデバイトについて理解している。(ワークシート) ○生成AIにおけるファクトチェックや認知バイアスの評価(見極め)等を行い、自身の意思決定における留意点を理解しようとしている。(ワークシート) ○生成AIを活用し、意図する画像が生成できるか、どのようなプロンプトを用いればよいか考えることができる。(成果物・ワークシート) ●生成AIを活用し、ハルシネーションに気をつけながら、根拠データを検証し、生成AIの特徴について理解を深めている。(発表・ワークシート)

第六次 2時間	◇「単元22：ネットコミュニケーションの特徴」について、インターネットを用いたコミュニケーションの特徴と注意点について理解を深める。 問 インターネットを介して行われるコミュニケーションにはさまざまな性質や現象があります。どのような特徴があるか考えてみましょう。 留)・「匿名性」や「記録性」に関する特性、「エコーチェンバー」や「フィルターバブル」等の現象について理解を促すよう工夫する。 問 インターネットを介して行われるコミュニケーションの性質についてメリット・デメリットを考えてみましょう。 留)・「匿名性」や「記録性」に関する特性、「エコーチェンバー」や「フィルターバブル」のような情報の偏りや閉鎖的な情報収集に伴う問題を取り上げ、生徒の身近な事例を用いながら理解を促すよう工夫する。 例えば、令和7年度の県知事選挙では悪質なデマ情報が拡散し、影響が出た。しかし、法的措置をとる方向で対応を進めていたが、最終的には「仮に数カ月かけて裁判を経て開示が認められても発信者のデータが残っていないと弁護士に伝えられた」という状況があり、断念したという事例がある。これが、情報流通プラットフォーム対処法という法律を適用した場合に、迅速さや削除基準等はどうなるのかについて考える。 問 インターネットを介して行われるコミュニケーションの性質についてメリット・デメリットを踏まえて、適切なコミュニケーション手段を考察し、選択してみましょう。 留)・メリット・デメリットについて理解を深めた状態で、実際に日常生活におけるコミュニケーションで適切なものを選択できるように促す。 例えば、緊急時の連絡はどのような手段が適切で、どのようなことに気を付ける必要があるか、締め切りまで余裕のある内容の連絡の場合はどのような手段が適切で、どのようなことに気を付ける必要があるかについて考える。	○	●	●インターネットを介して行われるコミュニケーションにおける現象について考え、それぞれの特徴を理解しようとしている。(発表・ワークシート) ○オンライン環境におけるコミュニケーションの特徴を踏まえ、それぞれのメリットとデメリットについて理解を深めている。(ワークシート) ●オンライン環境におけるコミュニケーションの特徴を踏まえ、それぞれのメリットとデメリットを踏まえ、状況に応じて適切な手段を考察し、選択することができる。(発表)
--------------------	--	----------	----------	--

単元のまとめ 1時間	◇本単元で、学んだことを踏まえて、情報機器やインターネット等を活用する際に、メディアリテラシーや情報モラルの観点から、情報を扱う上で、どのような点に気を付け、活用していくことが望ましいかを考察し、自分の考えをまとめる。 問 情報社会に主体的に参画する上で、安全かつ利便性を確保しながら、情報機器やインターネット等のサービスを利用するために必要なことは何でしょうか。 留)・日常生活におけるインターネット等に係るトラブルが多く発生している昨今の状況を踏まえ、一人一人がどのような意識をもって、利活用をしていけばよいか、リテラシーとモラルの観点からアプローチするよう助言する。 ◇情報活用合言葉「ふかひれ」とはなんでしょうか 問 情報活用合言葉「ふかひれ」を知っていますか。 留)・宮城県総合教育センターが発信している内容「ふ：普段のルールを忘れない」、「か：確認しよう、それ本当?」、「ひ：人の気持ちを考えよう」、「れ：冷静に判断しよう」の合言葉と実際の情報リテラシーを照らし合わせてイメージを持たせながら、理解を促す。	●	○	○メディアや生成AIの情報から「事実」と「意見」を客観的に切り分けたり、フィルターバブル等の偏りに配慮したりしながら信頼できる根拠を基に論理的に思考・表現し、主権者として主体的に情報社会に参画しようとしている。(ワークシート) ●合言葉をもとに、普段の生活において、情報活用をする際に、気を付けるべきことを理解している。(発表)
-----------------------	---	----------	----------	--

<参考サイト>

- ・「情報活用合言葉「ふかひれ」 - 宮城県公式サイト」<https://www.pref.miyagi.jp/site/sokyos/fukahire.html>
- ・「宮城県知事選挙で誤情報がSNSで拡散中 法令違反に問われる可能性もくまほQチェック」河北新報オンライン」(令和8年6月16日参照)
<https://kahoku.news/articles/20251023khn000019.html>
- ・「「やられ損。悔しい」 宮城知事選のデマ、村井氏は法的措置断念(毎日新聞)」<https://mainichi.jp/articles/20260610/k00/00m/040/195000c>
- ・「個人情報の保護に関する法律(e-Gov)」<https://laws.e-gov.go.jp/law/415AC0000000057/>
- ・「みんなのための著作権教室(CRIC 公益社団法人著作権情報センター)」<http://kids.cric.or.jp/>
- ・「IAT : Internet Addiction Test (インターネット依存度テスト)(久里浜医療センター)」<https://kurihama.hosp.go.jp/hospital/screening/iat.html>

Theory22 「ネットコミュニケーションの特徴」

- (1) インターネットのコミュニケーションでは、個人の特定につながるさまざまな個人情報を隠して利用することが可能である。この性質を何というか？

匿名性

※実名と匿名ではどのようなメリット・デメリットを教科書 P.54「表 I」で確認しましょう。

- (2) インターネットではコミュニケーションを完全に匿名で行うことはできないと言われている。その理由としてどのような性質があるからか？

記録性

※皆さんのスマートフォンやタブレット端末、学校のコンピュータ等でインターネットを利用すると、端末に割り当てられている IP アドレスや閲覧した Web ページ、閲覧日時等の情報がログとして残ります。

- (3) 「情報流通プラットフォーム対処法」について、旧「プロバイダ責任制限法」と比較してどのような点が大きく変わったのかまとめてみましょう。

変わった点	具体的な内容
①プラットフォーム事業者等の損害賠償責任の制限	特定電気通信による情報の流通により他人の権利が侵害されたときに、関係するプラットフォーム事業者等が、これによって生じた損害について、賠償の責めに任じない場合の規定を設けるものです。
②発信者情報の開示請求	特定電気通信による情報の流通により自己の権利を侵害されたとする者が、関係するプラットフォーム事業者等に対し、当該プラットフォーム事業者等が保有する発信者の情報の開示を請求できる規定を設けるものです。
③発信者情報開示命令事件に関する裁判手続	一体的な手続による発信者情報の開示を可能とした「発信者情報開示命令事件」に関する手続等について定めたものです。
④大規模プラットフォーム事業者への削除対応の迅速化及び運用状況の透明化	一定の要件を満たす大規模プラットフォーム事業者に対して、侵害情報送信防止措置の実施手続の迅速化及び送信防止措置の実施状況の透明化を図るための義務を定めたものです。

※参照元：インターネット上の違法・有害情報に対する対応(情報流通プラットフォーム対処法)

https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/d_syohi/ihoyugai.html (2026.6.30 参照)

(4)「記録の活用性」を活用した、皆さんの身近な事例について

事例	具体的な内容
①レコメンデーション (おすすめ機能)	Amazon などの EC サイトで、過去に見た商品やその関連商品が「あなたへのおすすめ」として表示されるサービス
②ターゲティング広告 (行動ターゲティング広告)	一度、某旅行サイトでホテルを検索した後、全く関係のない別のブログやニュースサイトを見ている時に、さっき検索したホテルの広告が表示される現象
③自動プレイリストの生成 (レコメンドアルゴリズム)	YouTube や Netflix、Spotify など、次に再生される動画が自動で選ばれたり、好みに合いそうな曲がまとめられたプレイリストが提案されたりするサービス
④パーソナライズド検索	同じキーワード(例:「カフェ」「天気」など)を検索しても、検索する人によって表示される検索結果の順位や内容が変わるサービス

※これらのサービスを利用する場合、「個人情報」と「利便性」はトレードオフの関係になっている。

(5)「情報の偏りと閉鎖的な情報収集による問題」について

事例	具体的な内容
①エコーチェンバー	定義 SNS 等で自分と似た興味関心や意見を持つ人をフォローした結果、自分の意見を発信すると「似た意見ばかりが返ってくる」状況。閉じた小部屋(チェンバー)で音が反響(エコー)することに例えられます。 注意点 自分の意見が多数派であると錯覚(確証バイアス)しやすくなります。「自分のタイムラインの世論は、社会全体の世論ではない」と自覚しないと、極端な思想に傾倒したり、他者への不寛容に繋がったりします。
②フィルターバブル	定義 アルゴリズムがユーザの検索履歴や閲覧履歴を学習、好まない情報を遮断して「見たい情報だけ」を提示し、ユーザがバブル(泡)の中に隔離される現象。 注意点 「検索結果や SNS のタイムラインは全員同じ」だと思いがちですが、実際は個人ごとに最適化され偏っていることに気づく必要がある。自分の知らないうちに「選択の自由」や「異なる視点」が奪われているリスクが潜んでいます。
③サイバークASCADE	定義 インターネット上で特定の意見や運動が、他者の行動を模倣する形で一気に雪崩(カスケード)のように連鎖・増幅し、集団の意見が過激化・極端化(集団分極化)していく現象。 注意点 「みんなが言っているから正しい」という同調圧力がネット上で加速し、特定の個人への誹謗中傷や炎上、デマの拡散に加担してしまう危険性があります。
④フェイクニュース	定義 政治的・経済的な利益(PV 数稼ぎなど)や、社会的な混乱を目的として、意図的に作成・拡散される偽の情報。近年は災害時のデマや、生成 AI によるディープフェイクも問題視されています。 注意点 感情を揺さぶる(怒りや不安を煽る)見出しが多く、上記 3 つの罠(フィルターバブル、エコーチェンバー、サイバークASCADE)が揃うことで、「信じたいフェイクニュース」が爆発的に拡散する悪循環が生まれます。

(6) 本単元（Theory22）で学んだ内容を踏まえ、インターネットを介したコミュニケーションのメリットやデメリットを考え、自分なりに考えた内容を下記にまとめてみましょう。

	メリット	デメリット
①	物理的・時間的制約を超えた「多様なつながり」の形成 内容学校や地域といった狭いコミュニティを超え、共通の趣味や目標、課題（学習や社会貢献など）を持つ世界中の人と瞬時につながることができます。不登校の生徒や孤立しがちな人が、ネット上で居場所（サードプレイス）を見つけられる点も大きなメリットです。	歪んだ「エコーチェンバー」による視野の狭窄と極端化 内容フィルターバブルによって「自分が心地よい情報」だけが自動選択され、SNS上で同じ意見の人だけで群れるため、異なる意見を排除する傾向が強まります。これにより、視野が狭くなり、社会的な分断や他者への不寛容が生じる原因になります。
②	主体的な「情報収集・発信と社会参画」のチャンス 内容生成 AI や検索エンジンを駆使して、マスメディアが報じない多角的な情報を自ら集めることができます。また、一主権者として社会問題に対する自分の意見やアイデアを世界に向けて低コストで発信し、世論を動かす仲間の募集や署名活動など（社会参画）に繋げることも可能です。	② 同調圧力と「サイバーカスケード」による誹謗中傷・炎上の加担 内容ネット上では特定の批判や意見が雪崩のように連鎖しやすく、集団心理によって個人の攻撃性が増幅されます。「みんなが叩いているから」「これが正義だから」という同調圧力に飲まれ、高校生が無自覚に深刻な誹謗中傷やデマ（フェイクニュース）の拡散に加担してしまうリスクがあります。
③	コミュニケーションの「効率化・アーカイブ性」 内容テキストや動画でのやり取りは「後から見返せる（アーカイブ性）」ため、言った・言わないのトラブルを防ぎ、共同学習の効率を飛躍的に高めます。対面では緊張して発言できない生徒も、テキストであれば自分のペースで思考を整理して発言できるという心理的安全性も、もたらします。	③ 「非言語情報の欠如」による誤解とネット依存 内容テキスト中心のやり取りでは、表情、声のトーン、身振りなどの「非言語情報」が伝わらないため、悪気のない一言が誤解を生み、人間関係のトラブル（いじめや絶交など）に発展しがちです。また、通知や「いいね」の承認欲求を刺激する仕組みにより、長時間の利用（ネット依存）を引き起こし、睡眠不足や学力低下といったリアルな生活への悪影響をもたらします

まとめ「情報リテラシー」

これまで関連する単元 (Theory) で学んだことを踏まえ、これからの生活で身に付けるべき力をそれぞれ考えて、自分の意見をまとめましょう。

身に付けるべき力	なぜこの力が必要なのか
①情報を「切り分ける」力 (事実と意見の分離)	膨大な情報の中から、客観的に証明・測定できる「事実 (ファクト)」と、発信者の主観や推測である「意見 (オピニオン)」を正確に見極める力です。 ネット上のニュースや SNS の投稿には、個人の感情を揺さぶる強い言葉 (「絶対に」「悲惨な」「明らかに」など) が意図的に交えられています。高校生がこれらをすべて「事実」として受け止めてしまうと、他人の意見に簡単にマインドコントロールされてしまいます。
②情報の「歪み」に気づく力 (アルゴリズムと 認知バイアスの自覚)	自分のスマートフォンで見ている世界は、決して「世の中の平均ではない」と自覚する力です。 現在のインターネットは、検索履歴や閲覧履歴を AI が学習し、ユーザ好みの情報だけを表示する「フィルターバブル」や、SNS で似た意見の人ばかりが繋がる「エコーチェンバー」という仕組み (アルゴリズム) が働いているためです。
③情報の「意図」を読み解く力 (情報デザインの解説)	グラフの見せ方や、ニュースの見出し、画像の切り取り方など、「情報デザイン」の裏にある発信者の意図を見抜く力です。 同じ統計データであっても、グラフの縦軸の目盛りをわざと狭くすることで「急激に増加している」ように錯覚させることが可能です。情報デザインの仕組みを知らないと、発信者が誘導したい印象にそのまま流されてしまいます。
④意思決定の「主体」を 譲らない力 (デジタルシティズンシップ)	生成 AI の回答やネットのまとめ情報を鵜呑みにせず、「最終的な判断の責任は自分 (人間) にある」という当事者意識を持つ力です。 ChatGPT などの生成 AI は非常に便利ですが、もっともらしい嘘 (ハルシネーション) をつくことがあります。「AI が言ったから」「みんながシェアしているから」と、自分で考えることを放棄してしまうことは、主権者としての権利を放棄することと同じです。

※他にも「情報を「編集・発信する」力」、「AI やテクノロジーと「対話する」力 (プロンプト・リテラシー)」、「デジタル空間の「安全と倫理を守る」力 (データガバナンスと法的リテラシー)」なども考えられる。

「情報活用合言葉『ふかひれ』」について

宮城県総合教育センターでは、情報モラル教育教材の開発などもしているので、時間があるときに確認してほしい内容になります。

<https://www.pref.miyagi.jp/site/sokyos/fukahire.html>



情報活用合言葉「ふかひれ」

ふ ふだん 普段のルール わす を忘れない

か かくにん 確認 ほんとう しよう、それ本当？

ひ ひと 人の きも 気持ちを かんが 考えよう

れ れいせい 冷静に はんだん 判断しよう



イメージキャラクター「ふかひれ」



宮城県総合教育センター
Miyagi Prefectural General Education Center



主権者教育（情報リテラシーの育成）実践事例

学校名	宮城県石巻西高等学校 全日制課程		
教 科	情報科	科 目	情報 I
単位数	2 単位	対象学年	1 年次
単元名	情報社会	内容のまとめ	情報社会の問題解決
単元の目標	情報と情報技術を活用した問題の発見・解決の方法に着目し、情報社会の問題を発見・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるようにする。 (1) 情報やメディアの特性を踏まえ、情報と情報技術を活用して問題を見・解決する方法を身に付ける。 (2) 目的や状況に応じて、情報と情報技術を適切かつ効果的に活用して問題を見・解決する方法について考える。 (3) 情報社会における問題の発見・解決に情報と情報技術を適切かつ効果的に活用しようとする。		
単元の評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	①情報やメディアの特性を踏まえ、情報と情報技術を活用して問題を見・解決する方法を身に付けている。	①目的や状況に応じて、情報と情報技術を適切かつ効果的に活用して問題を見・解決する方法について考えている。	①情報社会における問題の発見・解決に情報と情報技術を適切かつ効果的に活用しようとしている。
教材名等	「情報 I Step Forward!」(東京書籍) 「騙されない為の教科書」(若者・高校生のための消費者教育 - ハッシュダイソール) 「ベーシックレベル情報I」(スタディサプリ)		

指導と評価の計画(11時間)

○「評定に用いる評価」 ●「学習改善につなげる評価」

次	ねらい・学習活動等 ◇学習活動の概要 問主発問 留指導上の留意点	評価の観点			評価規準等
		知	思	態	
単元の導入 1時間	◇宮城県女川町のクマ出没フェイク画像や青森県の「くまログ」への虚偽投稿事例等を参考に、情報の特性について理解する。 問 なぜ、偽の情報が短期間で拡散し、大きな混乱を招いたのか。また、私たちは情報の「正しさ」をどう守るべきか。 留 ・情報の特性（残存性、複製性、伝播性）と結びつけ、SNSの拡散速度と社会的影響を意識させる。 ・デジタルデータの「容易な加工や発信」という特性が、意図せず社会を混乱させるリスクがあることを意識させる。	●			●情報の特性（残存性、複製性、伝播性）が社会的混乱を招く要因になることを理解している。(ワークシート・発言)

第一次 4時間	◇マスメディアとソーシャルメディアの責任と役割の違いを学ぶ。 問 情報を発信する際、私たちはどのような責任を負うべきか。 留)・「誰が、いつ、何の目的で」発信したかを確認し、時間をかけて信ぴょう性のある情報であるかを確認する重要性を理解させる。 ◇「騙されない為の教科書」を活用し、闇バイトやフィッシング詐欺等の最新手口を理解する。 問 怪しい誘いや不確かな情報に遭遇したとき、私たちはどう行動すべきか。 留)・「いったん疑う、とりあえず調べる、まずは相談する」の重要性を強調し、ファクトチェックの実践を促す。 ◇SNS 広告の「稼げる副業 (タスク詐欺)」や「有名人のなりすまし投資詐欺」を例に、情報の真偽を確認する実習を行い、レポートとしてまとめる。 問 信頼できる情報源 (公的機関、一次情報等) と、SNS 上の噂をどう区別するか。 留)・情報には送り手が存在し、意図やフィルタがかかっていることを認識させる。特に詐欺広告では、「楽に稼げる」と思わせるためにあえて情報をフィルタリングしていることを指摘する。 ◇エコーチェンバーやフィルターバブル等の仕組みとリスクを理解し、自分のスマートフォン画面が社会の全貌ではない可能性について議論する。 問 自分に似た意見ばかりが届く環境には、どのようなリスクがあるだろうか。 留)・自分の考えに固執せず、対立する意見も含めた多角的なクロスチェックを意識し、考察ができるようにする。	○ ● ○ ○	○ ○ ○	○情報の送り手の意図や背景を想像し、メディアの特性に応じた適切な情報活用について理解している。(発表) ●不確かな情報を鵜呑みにせず、事実を確認し、他者と相談して自律的に判断しようとしている。(ワークシート) ●メディアが社会の世論形成に及ぼす影響を論理的に分析する技能を身に付けている。(レポート) ○複数のメディアや情報源をクロスチェックし、情報の妥当性を論理的に判断している。(レポート) ○情報の偏りを生む仕組みを理解し、社会の合意形成や個人の意思決定に与える影響を多角的に考察している。(発表)
--------------------	---	-------------------------------------	----------------------------	---

第二次 3時間	◇AI の仕組み（AI が確率的にもっともらしい言葉を予測している仕組み）をプロンプト入力体験を通して、理解を深める。 問 生成 AI がハルシネーションを発生させるのはなぜだろうか。 留）・個人情報や機密情報を入力することは、情報漏洩だけでなく、情報が自分の管理下から離れるという重大なリスクを伴うことを認識させる。 ・「AI は嘘をつくのではなく、もっともらしさを優先する」という本質を強調する。 ・AI の回答が必ずしも正確でない原因は、AI は事実を学んでいるわけではないことも意識させる。 ◇生成 AI を使って「自分の名前を出さないプロフィール&クイズ」等を作成させ、ハルシネーションを探す。 問 AI が生成した回答をそのまま SNS に投稿した場合、どのような責任が生じるか。 留）・ハルシネーションの実例を体験し、ファクトチェックの重要性を理解させる。 ◇AI に特定の役割（探究アドバイザー等）を与え、対話を通じて自分の探究活動の在り方について考えを整理・改善をする。 問 AI と共存するこれからの社会で、私たちはどのような責任を持って情報に関わるべきだろうか。 留）・AI を「万能な回答者」ではなく、「対話のパートナー」として批判的に活用する視点を持たせる。 ・AI は石巻や東松島等のローカルエリアの情報は詳しくない可能性があるため、AI の回答を他のソースでクロスチェックし、最終判断は人間が行う必要性を強調する。	● ● ●	○	●生成 AI の基本的な仕組みとリスク（ハルシネーション、著作権、個人情報）を理解している。（小テスト） ●目的や条件（プロンプト）を工夫して情報を活用する技能を身に付けている。（生成 AI ログ） ○生成 AI の回答には誤りが含まれる可能性を理解し、ファクトチェックの必要性を判断している。（ワークシート） ●AI を批判的に活用する視点を持ち、ハルシネーションのリスクを考慮しながら、自らの考えを整理・改善するために粘り強く対話を続けている。（生成 AI ログ）
第三次 2時間	◇インターネットトラブルに関わる主な法律と社会の動きを学び、デジタル・シティズンシップの観点から、より良い社会にするための行動を考え、レポートとしてまとめる。 問 多様な意見が存在し、情報技術が進化し続ける社会において、責任ある行動をとるために必要なことは何か。 留）・情報技術に「使われる」のではなく、「使いこなす」という主体的な態度を促す。 ・情報技術を適切に活用しながら、社会に貢献する在り方を構想させる。	●	○	●情報社会を支える法規や制度、個人の責任と権利について正しく理解している。（レポート） ○情報社会の諸課題に対し、より良い社会の形成に向けて自分ができていることを論理的に表現している。（レポート）

単 元 の ま と め 1 時 間	◇単元の学習を振り返り、自律した情報の利用者として、社会参画する際の「情報利用ガイドライン（「フェイクニュース被害を減らすための提言」等）」を作成し、発表する。 問 よりよい社会を築くために、情報の「受け手」かつ「発信者」として信頼できる情報社会を維持するために、私たちはどのようなルールやマインドを持つべきか。 留）・個人の責任と情報モラルの観点から、具体的な行動指針を論理的に表現させる。 ・単なる自己防衛を超えて、望ましい情報社会を共に創る「参画」の視点を持たせる。		○	○	○情報やメディアの特性、および情報技術が社会に及ぼす影響を多角的に捉え、自らが情報の「受け手」かつ「発信者」として大切にすべき具体的な行動指針を、論拠を持って論理的に表現している。（ガイドライン） ○単元での学びを踏まえ、社会の一員としての責任を自覚し、より良い情報社会の実現に向けて主体的に行動しようとしている。（発表）
---	--	--	---	---	---

主権者教育(情報リテラシーの育成)実践事例

学校名	宮城県仙台二華高等学校 全日制課程		
教 科	グローバル・スタディ 課題研究 (以下GS課題研究)	科 目	GS課題研究Ⅰ～Ⅲ 総合的な探究の時間
単位数	2 + 3 + 2 (Ⅰ + Ⅱ + Ⅲ) 2 + 3 + 0 (Ⅰ + Ⅱ) 2 + 1 + 0 (Ⅰ + 総探)	対象学年	1 ～ 3 年
School Mission	豊かな心と高い知性を持ち、進取の気風と創造性にあふれ、社会のリーダーとして、わが国や世界の発展に貢献できる人材を育成する。		
大切にしていること	本校では特色ある教育活動「課題研究」、「国際交流」、「国際バカロレア」を行う際、フィールドワーク等の校外での体験活動を通して「本物の世界」、「本物の自分」を知ること、さらに、不確実で混沌とした世界の中で、少ないリソースを存分に利用して、自分でリスクをとって自分の夢や希望をかたちづくる前向きな気持ちと行動力を育成することを大切にしている。 具体的には以下のような、社会を一人で生きていく力を養うことである。 自分で考える力。人と協働する力。試行錯誤のする力。失敗から立ち直る力。 粘り強い精神力と体力。危機管理のスキル。新しい環境への適応力。		
研究テーマ	北上川／東北地方、メコン川／東南アジアをフィールドとした世界の水問題解決のための取り組み		
校外活動	徹底した現場主義： 現地で課題を発見し、現地の人々と一緒に試行錯誤しながら解決策を考え、現地で成果を共有する。 1年：広瀬川フィールドワーク、北上川フィールドワーク 2年：海外研修旅行（令和8年度はマレーシア） メコン川フィールドワーク（カンボジア、ベトナム、タイ、ラオス） 1・2年：デラウェア（米国）派遣研修、台湾派遣研修		
各科目の概要	1 GS 課題研究Ⅰ 1年次／必履修／2単位（総合的な探究の時間代替科目） (1) Book Review & Recommend（20時間） 自分の好きな新書を用いて自己紹介し、友人が紹介した新書の中から2冊目、3冊目を読み、その中から1冊選んで500字程度のReviewを書く（後日冊子にする）。 (2) 模擬国連（14時間） 生徒が2名一組で一国の外交官となり、指定された国際会議の場で「自国の利益」と「自国民の幸せ」を最優先にして、自国にとって有利な国際ルールを作るロールプレイゲームを行う。令和8年度は「移民問題」を議題とする。具体的なエビデンスを示しつつ、連携できる国と協力しながら自国に有利な決議案の採択を目指す。 (3) 北上川フィールドワーク（14時間） 川と人とのつながりを知るために実施するフィールドワーク。 Aコース：野蒜海岸・洲崎湿地を訪問し、震災で破壊された生態系の回復の様子を観察する。 Bコース：伊豆沼を訪問し、外来種による被害等を学習する。 Cコース：四十四田ダム・旧松尾鉱山新中和処理施設を訪問し、旧松尾鉱山から流出する強酸性の坑排水や砒素の処理方法について学習する。 全員：旧松尾鉱山跡地に植樹し、森の保水力を保つことで坑排水の排出量を減らす活動をしている。令和8年度で15年目。 (4) 探究実践（24時間） 探究の流れを一通りつかむために、「水環境・生態系」、「上水・利水」、「水処理・水循環」、「医療」、「アントレプレナーシップ」、「人文地理」、「治水」、「教育」、「課題研究Ⅱ・IB類型選択者」の9グループに分かれてグループ研究を行う。2年次で課題研究Ⅱを選択する生徒は、課題研究の先行論文を読んで自らの研究計画を立てる。		

	2 GS 課題研究Ⅱ 2年次／選択必修／3単位（総合的な探究の時間代替科目） タイ、カンボジア、ラオス、ベトナムの農村、山村、漁村をめぐる中で、自分たちだけでは解決が難しい水問題を抱えているコミュニティを特定し、その住民と一緒に試行錯誤しながら課題の解決を目指す。課題解決のために乗り越えなければならない、一つ一つのハードルが各生徒の研究題材となっている。 現在の連携コミュニティは、カンボジアの Tonle Sap 湖水上集落 Chong Khneas、Angkor Krau 村及びその周辺の村々、バイヨン中学校・高等学校の3つである。さらに、別の候補地も開拓中であり、タイの Chiang Rai 周辺の山岳民族の村々とベトナム Dong Thap 省の Long Khanh 村などへは、複数回の訪問・基礎調査をしている。年度末には、専門家からアドバイスをいただくために各生徒は各種の学会に参加し発表を行っている。生徒の立場からみることこれらの活動はまさに「高校生による本気の国際支援活動」である。 3 総合的な探究の時間 2年次／選択必修／1単位 海外研修旅行先の水問題及びその周辺の社会問題を探究する。マレーシア研修旅行では「多文化共生のモデル」と「パームヤシプランテーションによる環境問題・社会問題」をテーマとし、関連する課題をグループで1年かけて研究を行う。 4 GS 課題研究Ⅲ 3年次／自由選択／2単位 GS 課題研究Ⅱで年度末に参加した学会での専門家からのアドバイスを受けて、アイデアをさらに改良し、更に専門家からのアドバイスを受けるために夏の学会（全国大会）または国際学会で個人発表する。いただいたアドバイスは後輩へと引き継ぐとともに生徒自身で「課題研究ガイドブック」を改定する。
教材名等	課題研究ガイドブック（令和8年改訂 第7版）

探究的な活動でどのように情報リテラシー育成に取り組んでいるか

今年の重点目標：生成AIがそばにある探究活動

	課題研究の取組	情報リテラシー育成に係る取組
高 1	GS 課題研究Ⅰ (1) Book Review & Recommend (20時間) ・(春休みの宿題) 新書を1冊読む ・読んだ新書を使って自己紹介 ・紹介された本の中から2冊目を読む ・読んだ本を基に担任と二者面談 ・Review を Google Document に入力 ・2冊目をクラスで紹介 ・振り返り ・生成AI ガイダンス	Bool Review を書く際に以下のことを指導 Google Classroom、Google Drive の使い方 特に連絡方法の周知、ファイルの保存・管理の方法 Book Review & Recommend の振り返りの一環として生成AI ガイダンス（3時間） 生成AI でできること "Gemini"、"Chat GPT"、"NotebookLM" 生成AI の仕組み G、P、T の意味 生成AI を利用する際の注意事項 生成AI の使い方 推奨する使い方、推奨しない使い方、 禁止されている使い方 生成AI による脳への影響 学問的誠実性 特に、以下のような推奨する使い方の実例を紹介 ① 生成AI を「自分の解答の採点者」にする。 ② 生成AI をプレゼンの「聴衆」にし、質問させる。 ③ 生成AI を「英会話の相手」にする。 ④ 生成AI を「英作文の添削者」にする。

(2) 模擬国連 (1 4 時間) 「移民問題」 【論点 1】頭脳流出の防止と「循環型移民」の仕組みづくり 【論点 2】出稼ぎ (単純労働) 移民の「最低労働条件」と不法就労の責任 ・ 担当国に関する基本情報の収集 ・ 収集した情報のファクトチェック ・ 「Position Paper」の作成 ・ 会議の流れの確認 ・ 担当国の会議での戦略立案 ・ 「Negotiation Paper」の作成 ・ ロイロノートの使い方を説明 ・ 収集した資料の確認 ・ 会議における「Speech」の作成 ・ 会議本番 ・ 振り返り (3) 北上川 FW ・ 4 つの訪問先について、専門家から事前指導を受ける ・ 実際に訪問 ・ 訪問先について他の人に紹介 ・ 振り返り (4) 探究実践 ・ 最近のホットな話題 ・ 先行論文の探し方 ・ 生徒による探究活動 ・ 中間発表 ・ 生徒による探究活動 ・ 成果をスライドにして作成 ・ 全校課題研究発表会にて発表	⑤ 生成 AI を「進路カウンセラー」にする。 「Book Review」を、生成 AI を使って作成した (推奨しない使い方の例) 際の作品の特徴を分析する。 "Gemini"を用いて「移民問題」、「担当国の状況」に関する情報収集 ① 「正しい事実」として参照するための公的資料 (各国語でも可) を"NotebookLM"にアップロードする。 ② "NotebookLM"を用いてファクトチェックを行う。 場合によっては参照元を確かめる。 ③ 「Position Paper」を基に自国の戦略を"Gemini"を活用しながら立案する。 ④ 相手国を説得するための戦略について"Gemini"に相談する。 特になし 問の立て方： KJ 法、ケースメソッド、課題の構造図の作成 情報収集の方法・リソースの活用について 各メディアの特性 図書室、仙台市・宮城県図書館、東北大学・東北学院大学の図書館の利用法 論文検索の Website 課題研究でよく利用する Website 検証方法： 発表方法 Before ~After 形式 よいポスターの作り方 よいスライドの作り方 著作権、肖像権他 出典の探し方・書き方
--	--

高	GS 課題研究Ⅱ・Ⅲ	
2	所属グループの決定	
・	高3→高2 先輩から引継ぎ	
3	コミュニティの状況 研究の進捗状況、現在の課題 先行研究・参考文献の紹介	昨年度得られた新たな情報を基に、コミュニティが抱える課題の因果関係・経過等を図にした構造図を精緻化・改定し、今年度の活動目標を決める。 仮説と具体的な検証方法を考え、試行してみる。
	基本的な実験方法	実験機器類・ソフトウェアの使い方 ・パックテスト、大腸菌・一般細菌検査紙、pH 計、濁度計 ・微生物を使う場合のガイドライン ・GPS データロガー ・Google Earth Pro、Kaleida Graph ・GIS（地理情報システム） ・R、Python
	仮説と検証方法の提案 検証作業 メコン川 FW（8月と12月の2回） アンケート調査 インタビュー調査 水質調査 他	アンケートマニュアル インタビューマニュアル ①調査で使用するアンケートやインタビュー項目をつくる。 ②試行→訂正を繰り返し、最終的に日本語と英語で作成する。（場合によっては現地語） ③テキストマイニング等を用いて傾向・概要をつかむ
	データの整理・保管	データ分析（基本的な統計の手法） ・信頼性と妥当性 ・標本・母集団・区間推定 ・基本統計量とその意味 ・F 検定、様々な t 検定、χ^2 検定 ・相関係数と散布図 相関関係と因果関係の違い
	中間発表 検証作業 発表スライドの作成 学会発表（個人：東北地区）	構造図の再検討 学会の発表の際に指導を受けたことの記録と引継ぎ ・「課題研究ガイドブック」改訂 ・よい論文の書き方
	論文作成 論文集の発行	アカデミックライティング ・著作権

主権者教育（情報リテラシーの育成）実践事例

学校名	宮城県宮城野高等学校 全日制課程		
教 科	国語科	科 目	論理国語
単位数	2 単位	対象学年	2 年次
単元名	他者に伝わる意見文を書こう	内容の まとめ	〔知識及び技能〕 (2) 情報の扱い方に関する事項 〔思考力、判断力、表現力等〕 「A 書くこと」
単元の目標	(1) 情報を重要度や抽象度などによって階層化して整理する方法について理解を深め使うことができる。〔知識及び技能〕 (2) イ (2) 立場の異なる読み手を説得するために、批判的に読まれることを想定して、効果的な文章の構成や論理の展開を工夫することができる。〔思考力、判断力、表現力等〕 A (1) ウ (3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。〔学びに向かう力、人間性等〕		
本単元における 言語活動	賛否の分かれるテーマについて、自分の立場を明確にし、情報を適切に引用することで、他者に伝わるような意見文を執筆する。 (関連：〔思考力、判断力、表現力等〕 A (2) ウ)		
単元の 評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	①情報を重要度や抽象度などによって階層化して整理する方法について理解を深め使っている。(2)イ)	①「書くこと」において、立場の異なる読み手を説得するために、批判的に読まれることを想定して、効果的な文章の構成や論理の展開を工夫している。(A (1) ウ)	①学習の見通しをもって意見文を書くことを通して、自分の思いや考えが明確に伝わるよう、情報を適切に整理したり、批判的に読まれることを想定して文章を構成したり、論理の展開を工夫したりすることに粘り強く取り組もうとしている。
教材名等	【参考】「立場を明確にして書く」(大修館「論理国語」)		

指導と評価の計画(全8単位時間想定)

次	主たる学習活動	評価する内容	評価方法
1	- 単元の目標と進め方、言語活動の詳細及び評価の観点を把握し、学習の見通しをもつ。 - 意見文を書くテーマを決定し、そのテーマにおける自分の主張を考える。 - 自分の主張を支える情報を集め、<u>抽象度・重要性などの観点で階層化し、分類する。</u>	〔知識・技能〕 ①	「記述の確認」
2	- 前次で一旦分類した情報を、「論理性」(頭の納得)と「情理性」(心の共感)という観点で、ペアで互いに「再分類」しあう。 - 情報を互いにどう「再分類」しあったかを、その理由とともに共有する。 - ペアでのピア評価も踏まえ、<u>収集した情報の中で、自らの主張を支える論拠を吟味する。</u> <u>シンキングツールを用い、意見文のアウトラインを作る。</u> - 意見文を書く。	〔思考・判断・表現〕 ①	「記述の分析」
3	- 意見文の内容についてペアでのピア評価を行う。 - ループリックを読込ませた<u>生成A I を用いて添削する。</u> - ピア評価、<u>生成A I を用いた添削を踏まえ、意見文を書き直す。</u> - 本単元の活動を振り返り、成果と課題を挙げる。	〔主体的に学習に取り組む態度〕 ①	「記述の分析」

【単元の流れ】

次	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
	○単元の目標と進め方、言語活動の詳細及び評価の観点を把握し、学習の見通しをもつ。	・本単元は、以下の2つの活動で展開し、【条件①、②】を満たしているかが特に評価の観点として重要であることを伝える。	
	【本単元の言語活動】 テーマについて、 (1) <u>【条件①】 賛否いずれかの立場であるか、自分の立場を明確にし、</u> (2) <u>【条件②】 適切な情報を引用したり、読み手に合わせて構成を工夫したりすることで、立場の異なる相手にも伝わるよう 自分の意見を論述する。</u>		
1	○意見文を書くテーマを決定し、そのテーマにおける自分の主張を考える。 ○ <u>自分の主張を支える情報を集め、抽象度・重要性などの観点で分類する。</u>	・生徒にとって身近で、かつ賛否が分かれるような意見文のテーマ例をいくつか提示した上で、ペアで話し合い、互いに興味があり、かつ意見の分かれるようなテーマ設定をさせる。 テーマ例:「生徒の主体性を育てるには、学習を生徒自身が選ぶ形にするのがよい。だから、学校は宿題を出すべきでない。」「定期テストは負担が大きい。だから定期テストはやめて、すべての教科で授業内評価に変えるべきだ。」等 ・ <u>情報の妥当性や信頼性について吟味すること</u> (現代の国語 (2) エ) について、現代の国語で学習したことを確認し、 <u>情報のソースは新書や論文、新聞、官公庁統計データ等。収集ツールとしては「グーグルスカラー」や「総務省統計局 HP」、本校で契約している「ジャパンナレッジスクール」や「あさひ検索くん」などを活用させる。</u> ・ <u>ロイロノート上でシンキングツールを配布し、縦軸に重要性、横軸に抽象度をとり、収集した情報を自らの主張を支え得るかという観点で分類させる。</u>	[知識・技能] ① 「記述の確認」 <u>シンキングツール</u> ・ <u>情報を重要度や抽象度などによって階層化して整理する方法について理解を深め使っているかを確認する。</u>

2	○前次で作成したシンキングツールをペアで交換し、情報の適切さについて、ピア評価を行う。 ○情報を互いにどう評価したかを、その理由とともに共有する。 ○ペアでのピア評価も踏まえ、<u>収集した情報の中で、自らの主張を支える論拠を吟味する。</u> ○シンキングツールを用い、<u>意見文のアウトラインを作る。</u> ○意見文を書く。 ○意見文をペアで読み合い、内容のピア評価をする。 ○意見文について、ループリックを読み込ませた<u>生成A Iを用いて評価する。</u>	・シンキングツールを「論理性（頭での理解）」「情理性（心の共感）」の視点から評価するものに切り替えさせ、相互に評価することで他者視点を意識させる。 ・ペアでのピア評価を踏まえ、「そこから何が言えるか」という視点で、情報の受け手（ペア）の現状や傾向を理解させる。 ・ペアの評価の傾向と自らの情報の抽象度等を踏まえ、<u>どの情報をどのように用いて論証すればいいかを考えさせる。</u> (例)「〇〇さんは新しい情報を好む傾向があるようだから、興味を持ってもらえるように、最近の具体のニュースなどの例も盛り込もう。」等 ・ピラミッドチャートを使用させ、<u>最上段に主張、その下に「理由（根拠の抽象的なまとめ）」、さらに下に「事例やデータ（具体的根拠）」を配置させる。</u> ・意見文のテンプレートやループリックを示した上で、情報配置や展開を意識させ、400字程度の意見文を書かせる。 ・「論理」（頭での理解）と、「情理」（心の共感）の観点で評価させる。 ・<u>プロンプトの基本形をこちらで準備しておき、生徒は生成A Iにプロンプトと自らの意見文を読み込ませる。</u>	[思考・判断・表現] ① 「記述の分析」 <u>ワークシート、意見文</u> ・立場の異なる読み手を説得するために、<u>批判的に読まれることを想定して、効果的な文章の構成や論理の展開を工夫することができているかを分析する。</u>
---	--	---	---

3

(プロンプト例) 以下の手順で、入力された意見文を添削してください。 利用者が自分の意見文をより良いものにできるように、<u>手直した文章をそのまま提示することは絶対にせず、アドバイスのみ与えてください。</u>なお、利用者が、順を追って理解できるよう、ステップ毎に区切って対話を進めてください。 ステップ1：意見文のテーマの把握 まず、意見文のテーマを利用者から聞き出してください。 ステップ2：想定する読者のプロフィールや傾向の把握 次に、意見文の読み手として想定している読者のプロフィールや判断の傾向を聞き出してください。 (例) 40代の高校教員 公平性を重視し、出典が明確で、保守的な内容のものを好む傾向がある。 ステップ3：意見文の内容の把握 次に、利用者から意見文の内容を入力してもらってください。 ステップ4：意見文の添削 最後に入力された意見文を、次の5つの観点に基づいて1~4点で評価し、それぞれにコメントを添えてください。特に③と④を重視して添削してください。 ①主張の明確さと論理構成：主張が明確で、一貫した構成で展開されているか ②情報の選択と活用：主張を支える根拠が適切で、読者への訴求力があるか ③他者視点の導入と読者配慮：想定された読者像に対して、適切な配慮・表現がされているか（重点項目） ④説得力（論理×情理）：論理と感情の両面からの説得がなされており、読み手に腑落ちする内容か（重点項目） ⑤文字数：400字から600字の間で書けているか。		
○<u>ペアとの相互評価、AIによる評価を踏まえ、意見文を書き直す。</u> ○本単元の活動を振り返り、成果と課題を挙げる。	・「ロジカル」かつ「エモーショナル」な、ペアの「納得」につながる意見文を目指させる。 (<u>生成AIを用いた評価は絶対的なものではなく、「多様な他者の一人」であることを徹底させる。</u>) ・振り返り際には、学習課題に沿って、目標の達成状況の評価するように促し、自己評価の論拠や今後に生かしたい点、今後改善したい点等も記述させる。	[主体的に学習に取り組む態度] ① 「記述の分析」 <u>書き直した意見文、振り返りカード</u> ・学習の見通しをもって意見文を書くことを通して、自分の思いや考えが明確に伝わるよう、<u>情報を適切に整理したり、批判的に読まれることを想定して文章を構成したり、論理の展開を工夫したりすること</u>に粘り強く取り組もうとしているかを分析する。

※国語科の実践事例では、情報リテラシーの育成に関わる活動等については、波下線で示しています。

【参考資料】

- ・「高等学校学習指導要領(平成三十年告示)解説 国語編 https://www.mext.go.jp/content/20210909-mxt_kyoiku01-100002620_02.pdf
- ・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(高等学校編)国語 https://www.nier.go.jp/kAihatsu/pdf/hyouka/r030820_hig_kokugo.pdf
- ・「学習評価の事例集」(宮城県版)高等学校第2編(各教科)国語 <https://www.pref.miyagi.jp/documents/37207/3kokugo.pdf>

主権者教育（情報リテラシーの育成）実践事例

学校名	宮城県白石工業高等学校 全日制課程		
教 科	特別活動	活 動	ホームルーム活動
単位数	1 単位	対象学年	1・2・3 学年
題材・内容	ディベート活動を通して、情報の真偽を考えよう ※ディベートのテーマ設定により、ホームルーム活動の様々な内容とつなげることができます。今回は以下の内容と関連したテーマでの実践事例となります。 (2) 日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全 イ 男女相互の理解と協力 (3) 一人一人のキャリア形成と自己実現 ウ 社会参画意識の醸成や勤労観・職業観の形成		
本時の目標	インターネット等で調べた情報や人から聞いた情報を、ディベート活動を通して多角的に考察することで、情報の真偽や偏りに気づくことができる力を身に付ける。		
評価規準 (目指す生徒の姿)	よりよい生活を築くための知識・技能	集団や社会の形成者としての思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度
	インターネットに溢れる情報には真偽が定かでないものがあることを理解している。 適切な情報収集のスキルや、情報の整理の仕方を身に付けている。	互いの意見や考えを認め合いながら話し合い活動に取り組んでいる。 多面的に課題を捉えながら、その解決に向けて意欲的に取り組んでいる。	積極的に話し合い活動に参加し、参加者全員に対しわかりやすく伝えるためにどうすればよいか、粘り強く探ろうとしている。

	ねらい・学習活動等	指導上の留意点
一年次	〈ねらい〉 高校1年生であっても、物事を一面的に捉えてしまったり、一度受け入れた情報を無批判に正しいものとして信じ込んだりする生徒は少なくない。そこで、ディベートを通して自分とは異なる立場や意見に触れさせることで、多様な情報や考え方を比較・検討し、物事を多面的に捉える力を育成する。また、自らの主張を支える根拠を収集・分析し、その信頼性や妥当性を評価する過程を通して、情報を批判的に読み解く力を養う。さらに、反対意見への対応を考えることで、自分の考えを客観的に見直し、新たな視点を取り入れながらより適切な判断を行う態度を育成することをねらいとしている。	
	◇1人対1人のディベート 【1時間目のディベートのテーマ】 「スマートフォンのプランを無制限にしたい子供」 vs. 「阻止できないとお小遣いが減る親」 ① くじでペアを組む ② 子供役を廊下に集めテーマを発表する ③ 親役を廊下に集めテーマを発表する ④ 10分間で話合わせお互いに勝敗を決める ⑤ 役を交代し前回の勝者同士、敗者同士で組直し再び対戦する ⑥ 自分の考えをまとめ、全員一言ずつ発表する ⑦ 総括（教師） ◇グループ対グループのディベート 【2時間目のディベートのテーマ】 「スーパーの袋は必要か」 vs. 「スーパーの袋は不必要か」 ① 班分け ② ルール（流れ）説明 ③ テーマの発表 ④ ディベート ⑤ 自分の考えをまとめ、全員一言ずつ発表する ⑥ 「教師」対「生徒全員」で対戦を行う ⑦ 総括（教師） ディベートのルール(流れ) ① 肯定側の立論 ② 否定側の質疑 ③ 否定側の立論 ④ 肯定側の質疑 ⑤ 自由討論 ⑥ 否定側・最終弁論 ⑦ 肯定側・最終弁論	・初めてのディベートであることから、より身近な題目を設定することで、話し合いの内容を考えやすくする。 ・より役になりきるために、詳しく状況説明をし、奮起できるようにテーマを伝える。 ・考える時間や調べる時間はあえて取らず今の自分の知識・表現力だけで挑戦させる。 ・役を交代することにより相手の立場に立って物事を考えられるようにする。 ・ディベート実施時の自身の考えの変化などを踏まえさせ、賛成であっても反対であっても最後は自分の考えをまとめさせる。 ・本格的なディベートを経験させるため、ルールについてはあらかじめ提示し、一読するように伝えておく。 ・ジャッジは意見を伝えるのが苦手な生徒に行わせることにより、ディベートに参加しながらディベートに対する苦手感を減らし、次回のディベートに備えさせる。 ・制限時間を設けるが状況を判断し延長も行う（議論が成立するように時間を柔軟に使う）。 ・教師と戦う際は自分たちで勝てると思うテーマ（同じでも可）を選択させ賛成反対も選ばせる。

	ねらい・学習活動等	指導上の留意点
二年次	〈ねらい〉 事前にテーマを提示することで、参加者はインターネットなどを活用して情報収集を行うことができる。その際、様々な情報源に触れさせ、自分の意見を支持する根拠だけでなく、反対の立場の意見についても調査させる。これにより、情報の信頼性や妥当性を判断する力、多面的・批判的に情報を捉える力を養うとともに、根拠に基づいて自らの考えを形成し、予想される反論に適切に対応する能力を育成することをねらいとしている。 ◇生徒に200個のテーマ案を提示し、その中からテーマを決めさせてディベートを行う 【ディベートのテーマ例】 「男が得か」vs.「女が得か」 「遠距離恋愛は続くか」vs.「遠距離恋愛は続かないか」 ① 班分け（班分けアプリ利用） ② ルール説明（一年次と同じルール） ③ テーマの確認（テーマは生徒が事前に決める） ④ ディベート ⑤ 自分の考えをまとめ、全員一言ずつ発表する ⑥ 「教師」対「生徒全員」で対戦を行う ⑦ 総括（教師）	・テーマを生徒たちで決めさせることにより、より主体的に参加できるようにする。 ・ジャッジやチームをくじ引きで決定することで、楽しみながら活動に取り組む雰囲気をつくる。 ・制限時間はできる限り守らせ、より本格的な議論を行うことで思考力・判断力の向上につなげる。 ・教師と戦うことによって、大人の考え方や方略を伝えることができる。また、自分たちの成長の立ち位置を知ることができる。

	ねらい・学習活動等	指導上の留意点
三 年 次	〈ねらい〉 集大成となる今回の活動では、運営をすべて生徒に任せ、主体的に進行できるようにする。教師は、生徒が誤った認識をしている場合や質問を受けた場合であっても、基本的には介入せず見守る立場をとる。成功だけでなく失敗も含めて、生徒自身の経験として蓄積し、今後の学びに生かしていくことをねらいとしている。 また、今回からはディベート中の AI 活用を認める。AI を利用することで、多様な視点や根拠を短時間で収集し、より精度の高い主張や反論を構築できると考えるためである。一方で、AI が提示する情報が常に正しいとは限らないため、その情報の真偽や信頼性を自ら判断し、複数の情報源と照らし合わせながら活用する姿勢を身に付けさせたい。これは、情報を主体的かつ批判的に捉える情報リテラシーの育成につながる。 さらに、ディベートでは論理的な主張だけでなく、感情や価値観に基づく意見が示される場面もある。その際、AI には人間同士の感情の機微や文脈を十分に理解できない場合があることを実感させ、AI の利点と限界を理解した上で適切に活用する態度を養うことも本活動のねらいとしている。	
	◇班決め・テーマ決定・ジャッジなど運営をすべて生徒に委ねてディベートを行う ・ディベートが得意な生徒・不得意な生徒がいるので、肯定側・否定側のいずれかは AI を利用可能とする。 【ディベートのテーマ例】 「消費税 1 %にすべきか」 vs. 「現状維持か」 ① 1 週間ぐらい前に HR 委員にテーマや班決めに依頼 ② テーマが決まったら周知し、事前準備が可能であることを伝える。使用する意見共有ツールも生徒が決定し、事前準備をする。 ③ ルール説明（生徒が行う） ④ ディベート（進行も生徒が行う） ⑤ 自分の考えをまとめ、全員一言ずつ発表する ⑥ 世論調査の結果を伝える ⑦ まとめ ※ 2 時間目として、1・2 年次での取り組みと同様に「担任」vs. 「生徒」によるディベートを行う。過去に苦戦した対戦相手に対して善戦する体験を通して、情報を多角的に見る力など自身の成長を感じさせる。	・テーマを生徒たちで決めさせることにより、より主体的に参加できるようにする。 ・AI を利用し自分の意見をまとめさせる。また相手の意見を取り入れることにより、うまく反論できない部分をカバーさせる。 ・オンラインツールを利用し、意見を投稿することで、自分の意見を伝えることが苦手な生徒に配慮する。 (今回は「ふきだしくん」を使用した) ・生徒に現在の時事を選択させるように誘導し、就職試験や進路活動に関わる事に興味を持たせる。また、終わりに世論調査の結果などを提示することにより、自分たちの考えだけではなく世の中の考え方に目を向けさせる。